第１章　大館市の歴史的風致形成の背景

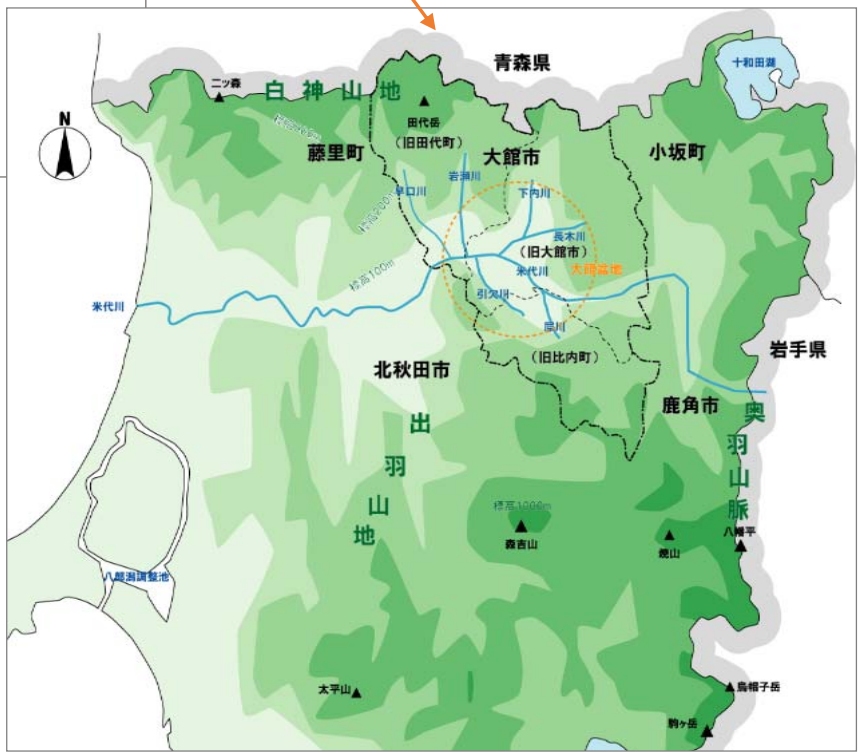
１．自然的環境

（１）位置

大館市は、秋田県の北部を流れる米代川（よねしろ）の中流域に位置し、東側は鹿角（かづの）市、小坂（こさか）町、西側は藤里（ふじさと）町、南側は北秋田市、北側は青森県と接している。米代川と長木川沿いに開けた大館盆地を中心に北西には白神山地から連なる田代岳(1,178m)があり、南には北秋田市と境を接する竜ケ森(1,050m)が森吉山麓まで続いている。

市庁舎(大館市字中城)の位置は、北緯 40 度 16 分、東経 140 度 34 分である。

（資料：国土地理院地図より）



大館市位置図（資料：都市計画マスタープラン）

（２）地勢

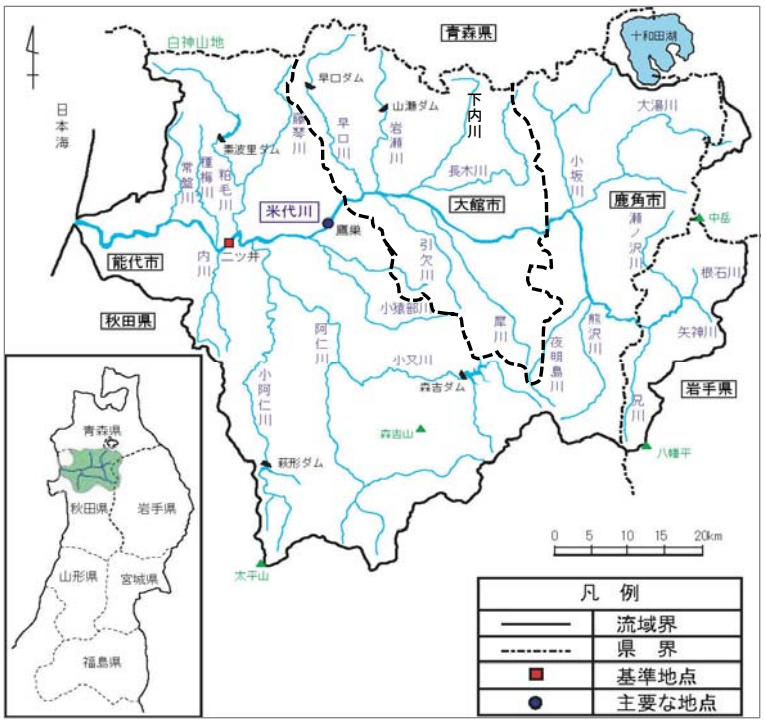
市域は、東西 35km、南北 49km、面積 913.22 ㎢で、秋田県全体の面積の 7.8%を占めていて、由利本荘市、北秋田市、仙北市に次いで４番目の広さである。

市の北西部には世界遺産白神山地の山々が連なり、東側に奥羽山脈、南西側に出羽山地が広がっていて、三方向が山々に囲まれている。

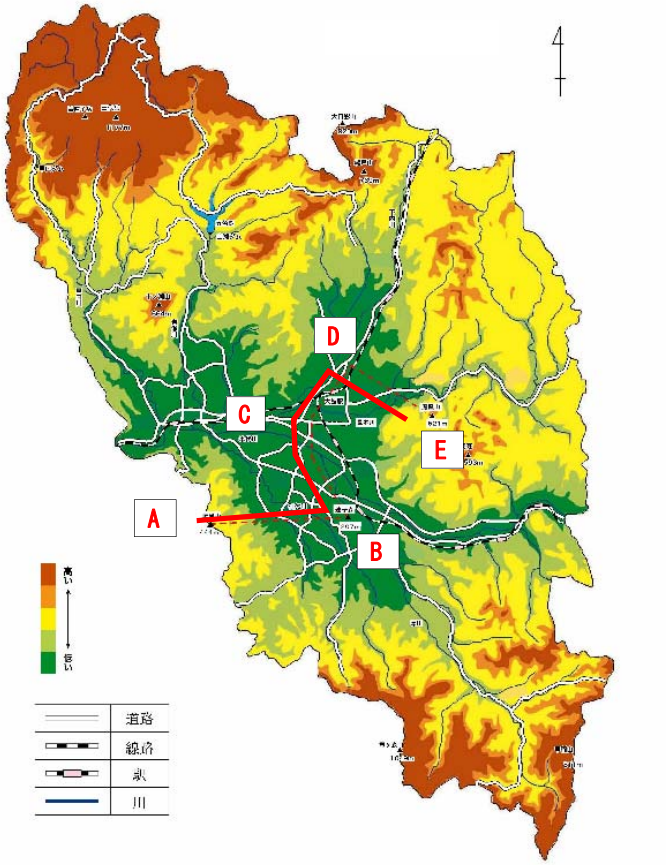
市内を流れる米代川への主な支流として東部を流れる長木川、南部の犀川と引欠川、北部の下内川、西部の岩瀬川、早口川が合流している。その上流部は原生林のブナ林をはじめ、秋田杉等の森林資源豊かな地域であり、また全長 136km の米代川は、途中花輪盆地、大館盆地、鷹巣盆地を形成しながら能代平野を経て日本海に注いでおり、県内では雄物川に次いで第２の長さを誇る。

大館盆地の最下層は安山岩や石英安山岩などが主であり、その上層には泥岩や凝灰岩が形成され、黒鉱鉱床が分布して古くから花岡や釈迦内、松峰、餌釣等で鉱山の開発が行われていた。表層は、粘土層（池内・船場・有浦・下代野）や十和田カルデラ形成時に噴出した火山灰層（本宮・片山・東台・釈迦内）で覆われている。

盆地の地形を模式的にみると西側の摩当山（444m）（A）から市民の



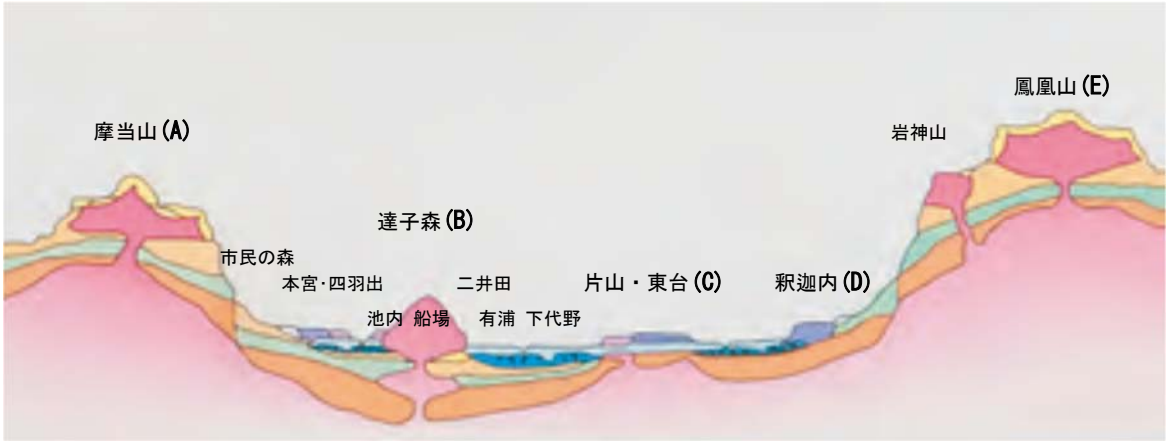
米代川水系流域図（資料：国土交通省）



大館市の土地の様子（資料：小学校社会科副読本）

※A から E は、次頁の地質・地形の模式図の断面箇所

森を経て、東側に小高く突き出た達子森(207m)(B)との間に水田地帯が広がり、達子森から北側の米代川両側にも水田地帯が広がって緩やかに高くなっている辺りに片山や東台(C)など市の中心部がある。その北部の釈迦内地区(D)との間の長木川沿いに有浦や下代野の市街地が開けている。そして東側には、山腹に「大」の文字を刻んだ鳳凰山(521m)(E)がそびえ、山頂からは市街地を一望できる。



大館盆地の地質・地形の模式図(資料：郷土博物館)

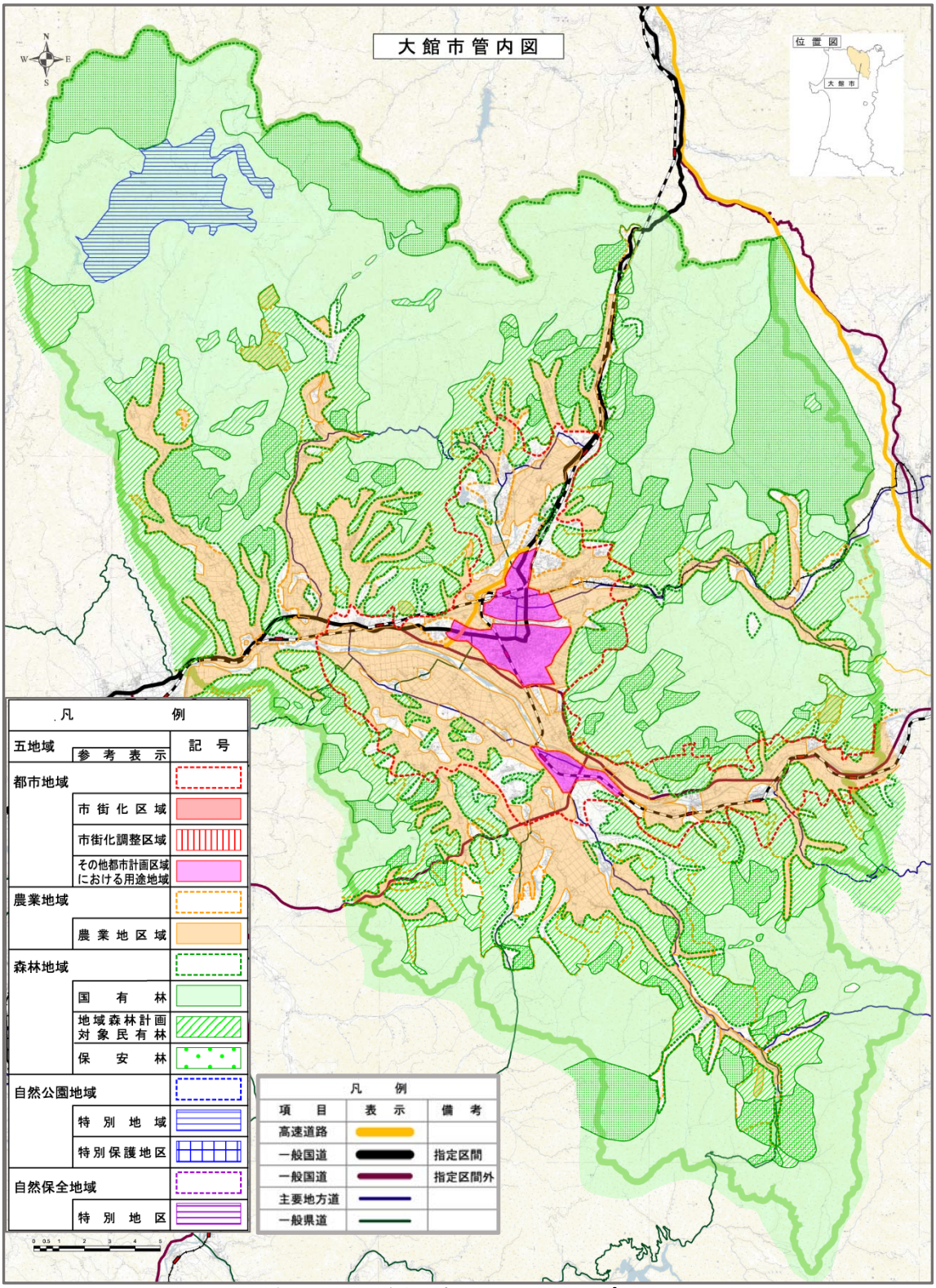
(３) 土地利用の状況

本市の総面積 91,322 ㌶のうち、森林が 78.7%と市域の大部分を占めており、この内、国有林が 46%である。農地は 8.4%で米代川とその支流の流域に広がり、稲作や畑作が行われている。残りは宅地が 2.5%、原野 2.3%となっており自然に恵まれた地域である。

(単位：ヘクタール、%)

項目	農地	森林	原野等	水面・河川水路	道路	宅地	その他	総面積
面積	7,690	71,868	2,115	2,505	1,921	2,267	2,957	91,322
割合	8.4	78.7	2.3	2.8	2.1	2.5	3.2	100

(「秋田県の土地利用【土地利用に関する現況】」平成 26 年 10 月 1 日現在から)



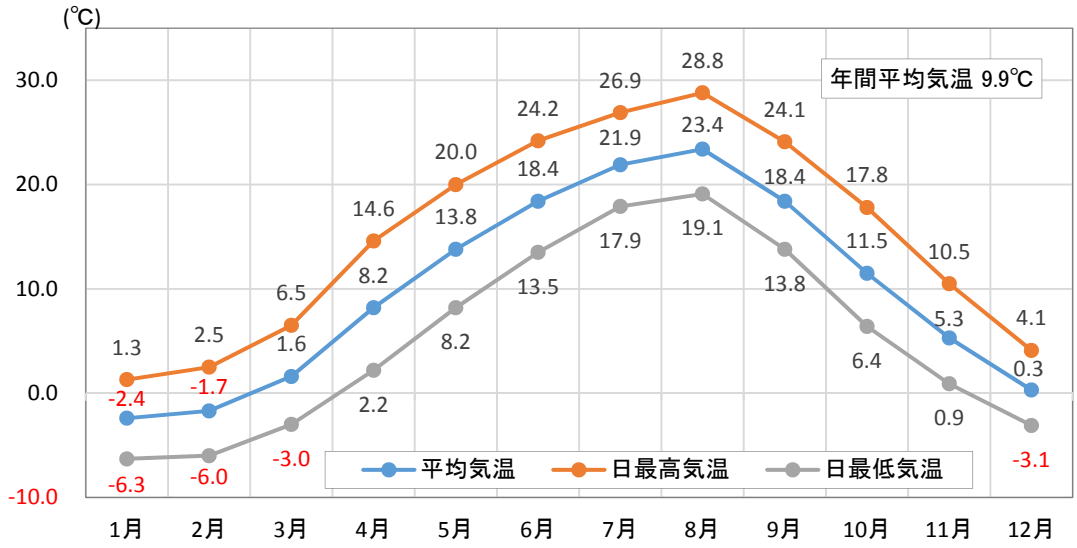
土地利用規制状況　（資料：都市計画マスタープラン）

（４）気候

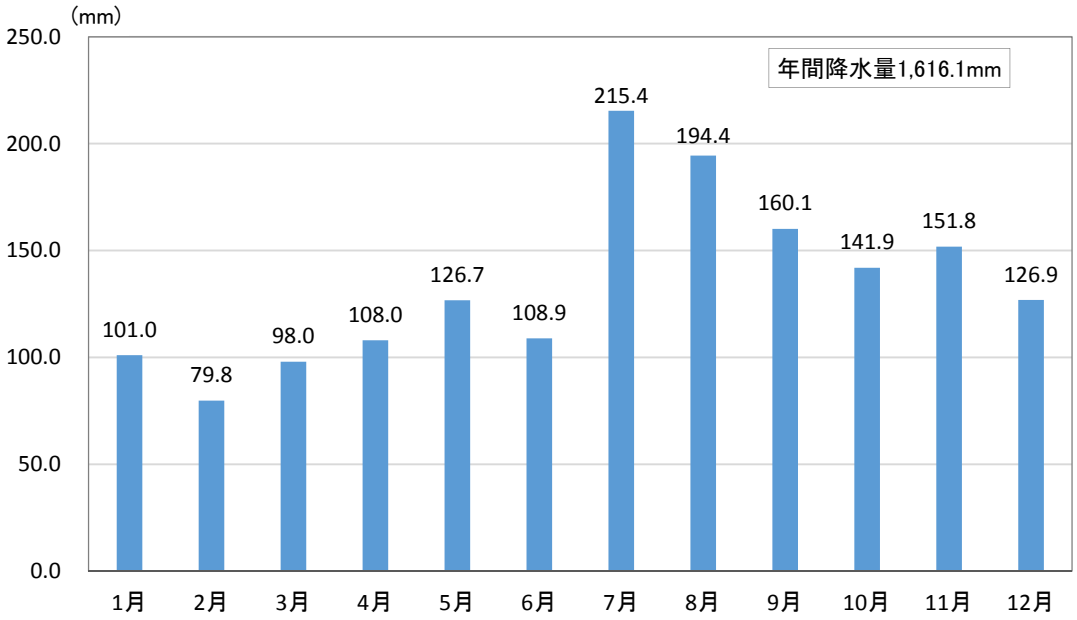
大館市は内陸部に位置していることから、年間の気温差が大きい「内陸性盆地型」気候であり、県全体と比較しても１月・２月の月平均気温が低く、また夏季になると「やませ」の影響を受けて低温になりやすくなる。

気温と降水量の平年値(昭和 56 年(1981)～平成 22 年(2010))では、年間の平均気温は 9.9℃、日最高気温 28.8 度、日最低気温-6.3 度であり、降水量は年間平均で 1,616.1mm である。

風力は、沿岸部と比較すると１年間を通じて弱く、強風や台風の影響が比較的少なくおだやかである。



月別平均気温・日最高気温・日最低気温(S56～H22)（資料：気象庁）

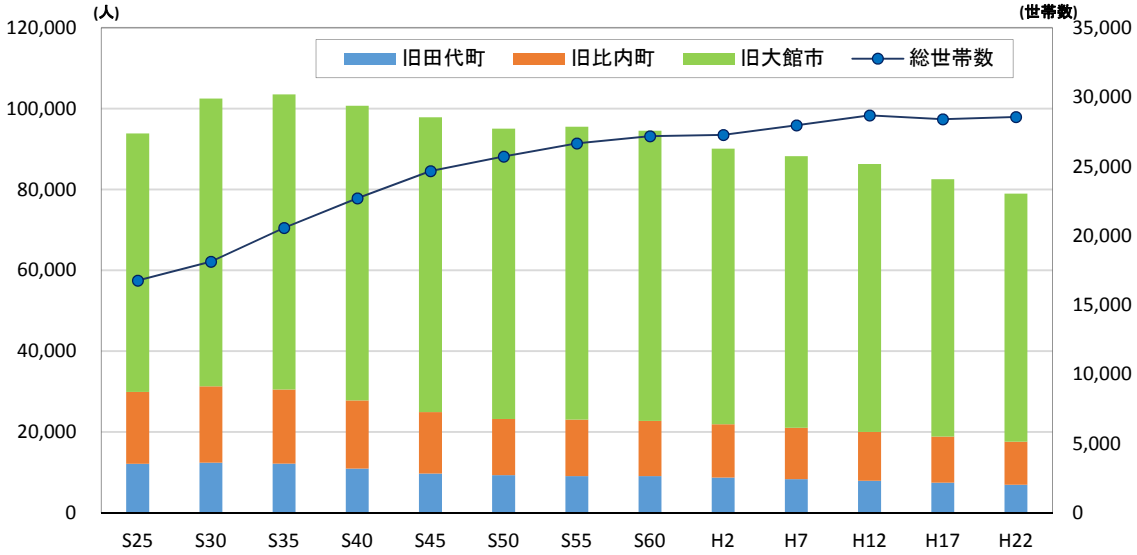


月別降水量(S56～H22)（資料：気象庁）

２．社会的環境

（１）人口

大館市の合併前旧市町村別合計人口の推移を国勢調査でみると、昭和 25 年(1950)は 93,841 人で、昭和 35 年(1960)にかけて 1 万人程度増加して 103,531 人とピークとなるがその後年々減少してきた。そして大館市、比内町、田代町が合併した平成 17 年では 82,504 人となり平成 22 年では 78,946 人へと減少した。昭和 35 年からみると、50 年間で 24,585 人の減(減少率 23.7%)であり、旧市町単位でも徐々に減少している。



大館市の地域別(合併前旧市町別)人口・総世帯数の推移　資料:国勢調査

区分・年	S25年	S30年	S35年	S40年	S45年	S50年	S55年	S60年	H2年	H7年	H12年	H17年	H22年
大　館　市	93,841	102,491	103,531	100,695	97,856	95,045	95,529	94,526	90,098	88,231	86,288	82,504	78,946
旧大館市	63,946	71,232	73,027	72,883	72,958	71,828	72,478	71,794	68,195	67,214	66,293	63,663	61,383
大　館　町	23,444	25,905	28,204	29,995	30,685	31,575	32,107	31,302	30,041	28,557	29,237	28,712	28,221
釈迦内村	3,612	6,899	6,969	7,363	7,802	7,951	8,856	8,953	8,189	7,877	7,693	7,577	7,319
長　木　村	4,255	4,315	4,145	4,206	4,736	4,671	4,812	4,936	4,749	5,198	4,674	5,064	4,857
上川沿村	2,960	2,905	2,858	2,759	3,546	3,386	3,590	3,952	3,919	3,812	3,637	3,461	3,366
下川沿村	3,524	3,462	3,461	3,598	3,623	4,511	4,833	5,198	5,233	6,581	6,428	5,391	5,365
真　中　村	2,634	2,581	2,451	2,429	2,270	2,081	1,901	1,882	1,804	1,733	1,622	1,544	1,378
二井田村	3,286	3,503	3,434	3,219	2,980	2,761	2,804	2,861	2,749	2,627	2,562	2,450	2,258
十二所町	5,832	6,220	6,253	6,093	5,730	5,474	5,364	5,134	4,765	4,541	4,479	4,097	3,781
花　岡　町	10,523	11,496	11,430	9,727	8,370	6,455	5,373	4,843	4,191	3,830	3,665	3,264	2,929
矢　立　村	3,876	3,946	3,822	3,494	3,216	2,963	2,838	2,733	2,555	2,458	2,296	2,103	1,909
旧比内町	17,796	18,873	18,350	16,891	15,186	13,905	13,992	13,683	13,200	12,713	12,095	11,388	10,622
旧田代町	12,099	12,386	12,154	10,921	9,712	9,312	9,059	9,049	8,703	8,304	7,900	7,453	6,941
総世帯数	16,752	18,126	20,559	22,693	24,658	25,710	26,654	27,173	27,271	27,963	28,677	28,406	28,565

大館市の地域別（合併前旧市町別）人口・総世帯数の推移　　資料：国勢調査

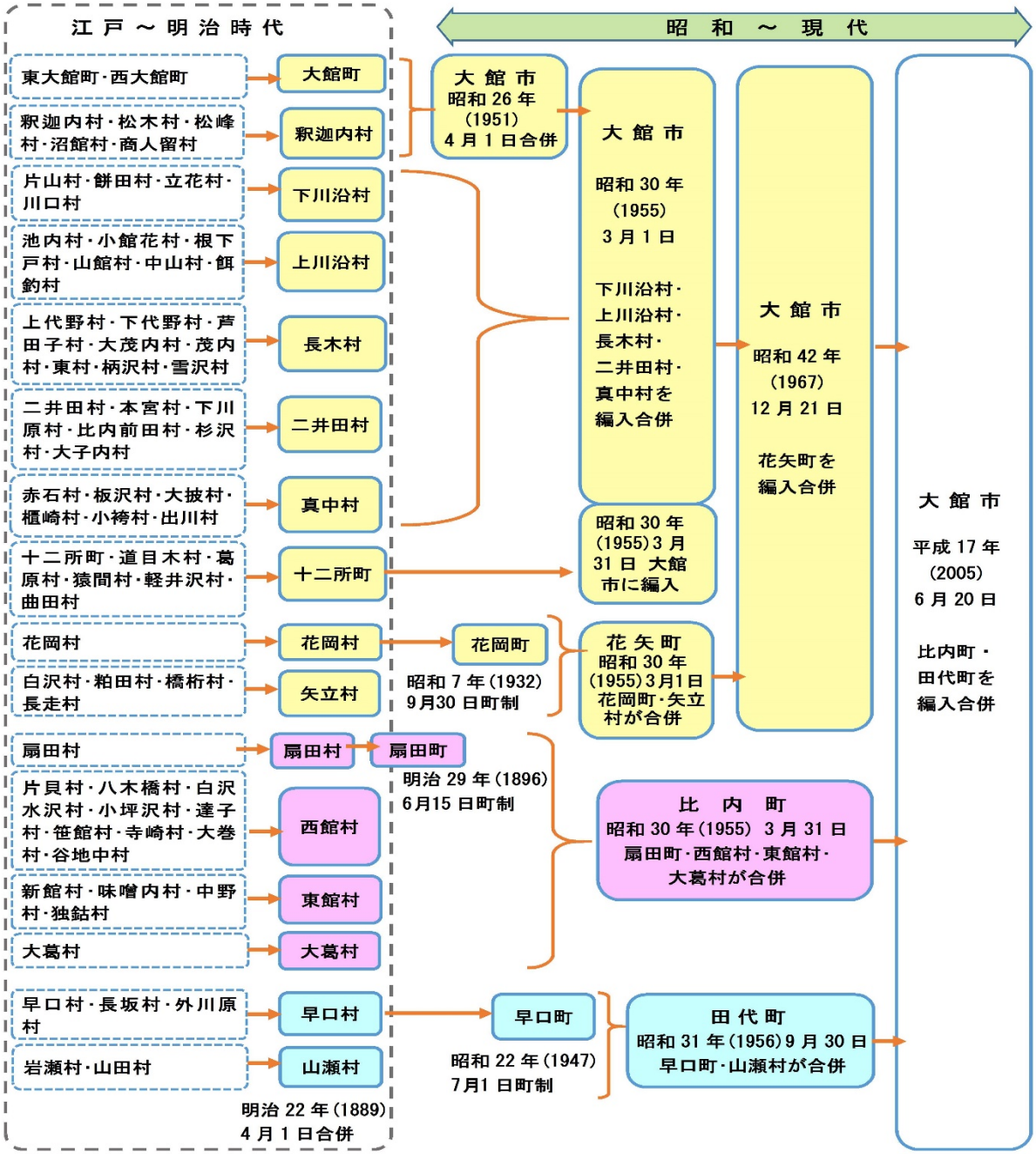
○合併の変遷

合併の変遷をたどると、明治 22 年(1889) 4 月 1 日の町村制施行により、大館町や釈迦内村など現在の大館市を構成する 16 の町村が誕生した。その後昭和 22 年までに扇田村、花岡村、早口(はやぐち)村が各々町制を施行。そして昭和 26 年(1951)に大館町と釈迦内村が合併し、全国で最も少ない３万人余の市として大館市が誕生した。４年後の昭和 30 年(1955)に下川沿村など５村を編入合併、昭和 42 年(1967)には花矢町(はなやまち)を編入合併し、人口は秋田市に次いで県内第２位の７万８千人余となり、県北経済の中心都市として発展してきた。

また、昭和 30 年(1955)には１町３村が合併して比内町が誕生し、昭和 31 年(1956)には１町１村が合併して田代町が誕生して、農業や林業を主な産業として発展してきた。

その後、平成 17 年(2005) 6 月 20 日、大館市と経済的、歴史的に繋がりのある比内町、田代町を編入合併して人口が８万２千人余の大館市が誕生し、県内第５位の人口となった。

明治 22 年(1889)合併時の行政界



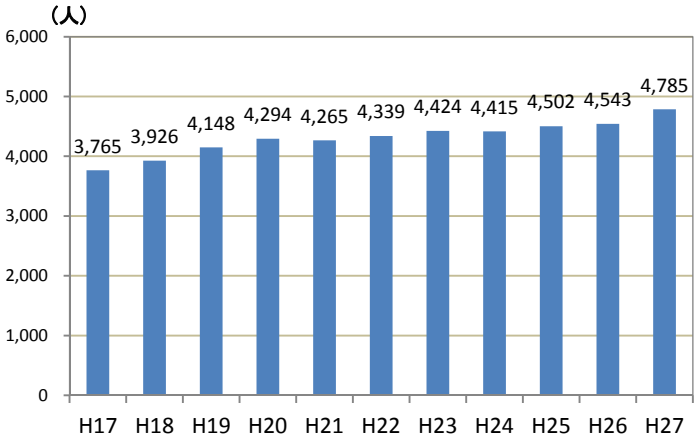
合 併 の 変 遷 表

（２）産業

大館市は、米代川流域の豊かな水資源に恵まれ、稲作を中心とした農業が営まれている。また畑作物では、畑のキャビアといわれるとんぶりやネギ、山の芋、アスパラガス、葉たばこ、ホップ、果樹では、りんごや日本なしなど多彩な農産物が生産されている。畜産では日本三大美味鶏といわれる比内地鶏（ひないじどり）の飼育が盛んなほか、豚や肉牛、乳牛も飼育されている。

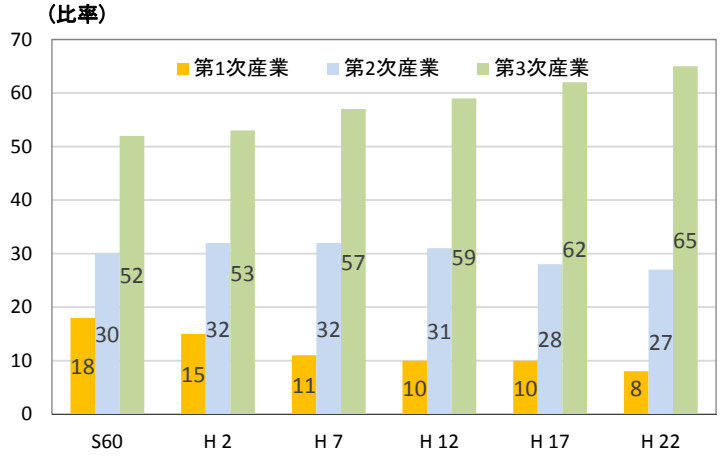
工業では木材・木製品があり、森林に恵まれていることから秋田杉が建築用材として出荷されているほか、秋田杉の特徴を生かした「大館曲げわっぱ」や「秋田杉桶樽」は、通商産業大臣（現経済産業大臣）指定の伝統的工芸品である。

また工業団地の整備と企業誘致を進めており、大館市工場等設置促進条例に基づく指定工場の従業員数は、4,785人（平成27年10月1日、商工課）となっている。



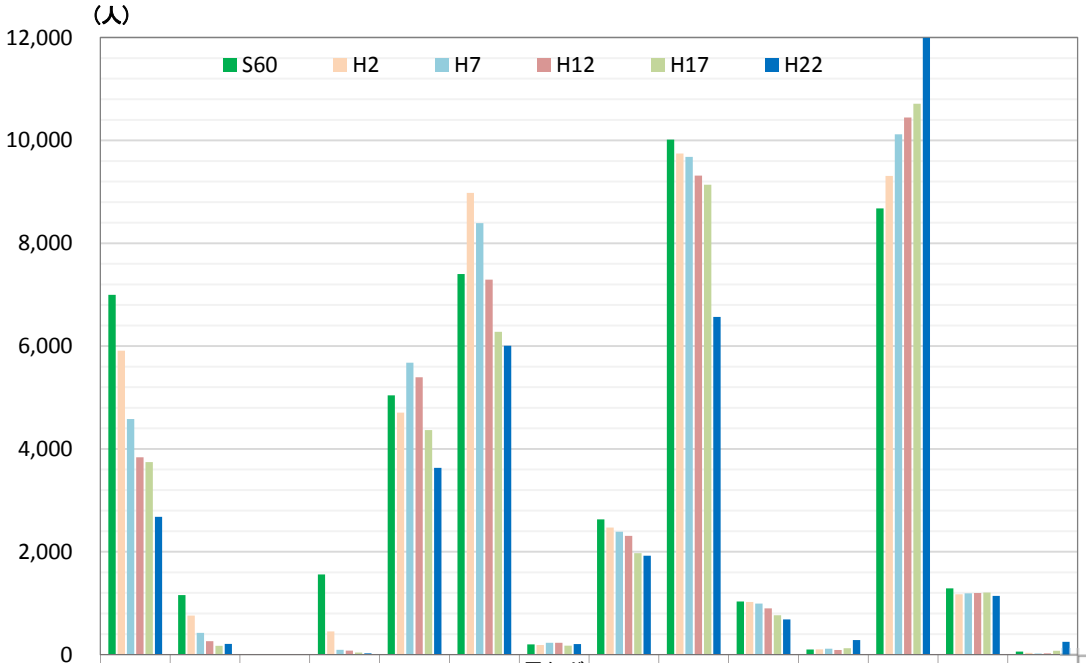
条例指定企業　従業員数　（資料：市商工課）

産業大分類別就業者比率をみると第１次産業は昭和60年（1985）以降減少しており、第２次産業が微減、第３次産業は増加傾向にある。産業中分類別の就業者数をみると、市全体では35,605人（平成22年国勢調査）で、製造業や卸小売業、サービス業等の就業者が多い。昭和60年以降の推移では、農業や林業、鉱業、運輸通信業、卸小売業、等が減少しているものの、サービス業は増加している。



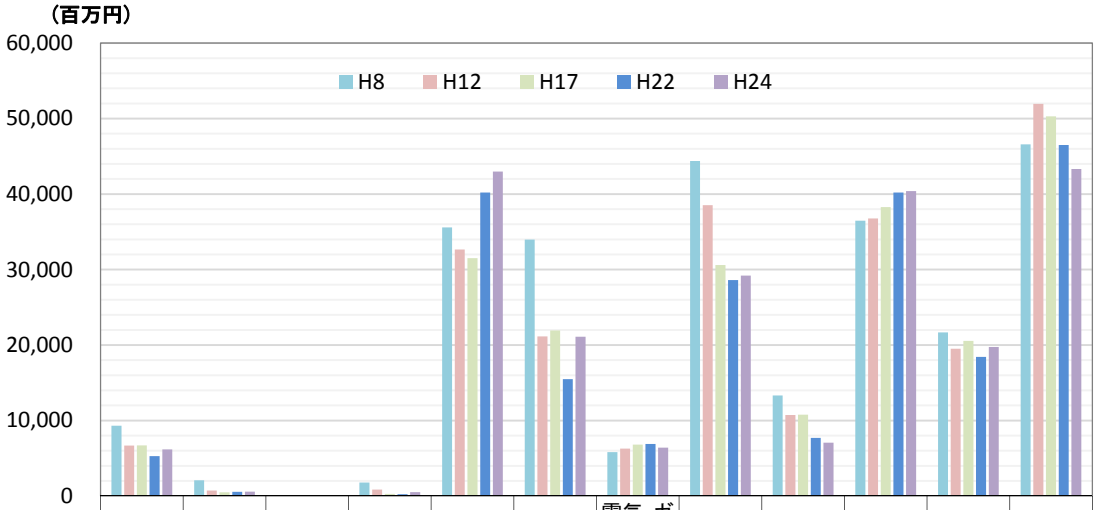
産業大分類別就業者比率の推移
（資料：国勢調査）

また、産業中分類別生産額の推移では農業や林業が平成８年（1996）以降減少傾向にある一方で、製造業は医療系業種の生産額の増加により平成17年（2005）以降伸びており、また不動産業も、主に郊外での住宅建設の伸びを背景として増加している。



	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気ガス水道業	運輸通信業	卸小売業	金融保険業	不動産業	サービス業	公務	その他産業	合計
S60	6,998	1,158	6	1,560	5,041	7,401	198	2,631	10,017	1,034	101	8,677	1,289	60	46,171
H2	5,910	761	4	451	4,705	8,978	186	2,472	9,744	1,025	104	9,308	1,174	33	44,855
H7	4,580	424	4	95	5,676	8,390	232	2,390	9,679	993	116	10,119	1,191	23	43,912
H12	3,838	262	5	79	5,394	7,293	230	2,308	9,314	901	91	10,446	1,199	26	41,386
H17	3,743	170	0	41	4,367	6,278	174	1,972	9,139	767	124	10,713	1,209	75	38,772
H22	2,679	210	3	24	3,633	6,006	205	1,925	6,568	684	284	11,994	1,141	249	35,605

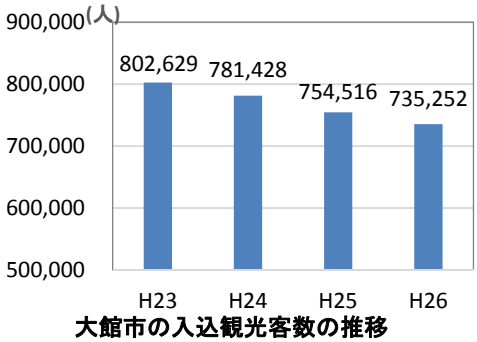
産業中分類別就業者数の推移 （資料：国勢調査）



	農業	林業	水産業	鉱業	製造業	建設業	電気・ガス・水道業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	運輸・通信業	サービス業
H8	9,306	2,076	27	1,788	35,583	33,981	5,823	44,392	13,329	36,482	21,672	46,583
H12	6,678	727	17	865	32,654	21,137	6,289	38,539	10,745	36,774	19,522	51,961
H17	6,714	504	12	283	31,517	21,940	6,819	30,595	10,785	38,271	20,551	50,288
H22	5,298	565	8	235	40,213	15,494	6,907	28,599	7,711	40,208	18,423	46,498
H24	6,176	583	0	514	42,974	21,095	6,419	29,203	7,058	40,389	19,743	43,326

産業中分類別生産額の推移（資料：秋田県市町村民経済計算から抜粋）

大館市の入込観光客数について近年の推移をみると、平成 23 年(2011)は 80 万２千人余であり、平成 24 年以降は、きりたんぽまつりの開催場所を大館樹海ドームに移した効果により観光客が増加したものの、市内の主な温泉地の客数の減少により、年間単位では徐々に減少している。



大館市の入込観光客数の推移
（資料：観光課）

（３）交通条件

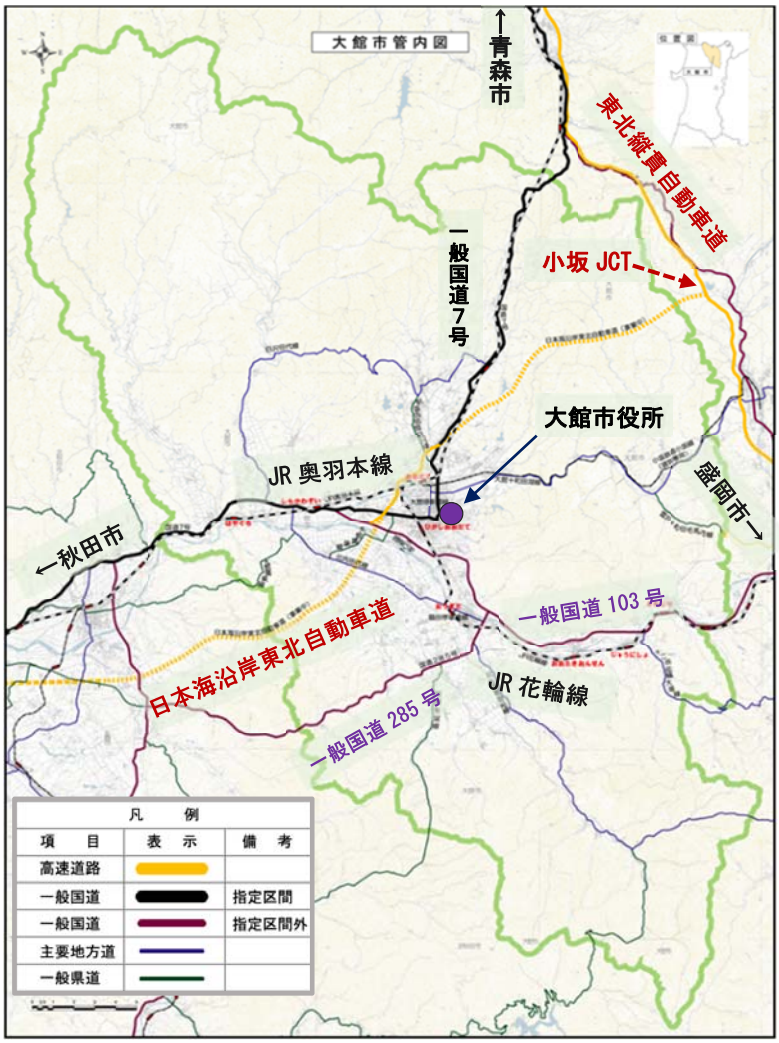
交通条件は、自動車では、県庁所在地の秋田市まで約 100km、青森県の青森市までは約 90km、岩手県の盛岡市まで約 110km、と３県をつなぐ交通の要衝にある。

広域的な道路網は、市内中心部を一般国道７号が北西に通り、その途中から一般国道 103 号が東側に伸びている。また市の中央部の南東方向に、日本海沿岸東北自動車道の一部が開通して東北縦貫自動車道の小坂 JCT で連結している。

鉄道は、青森市からの JR 奥羽本線が本市の北部から西側に通過して秋田市を経由後、上野駅まで結んでいる。また JR 花輪線が大館駅から東側に向かい盛岡駅まで結んでいる。

首都圏との連絡では、能代と東京池袋を結ぶ高速バスが、大館市を通過している。空の便では、大館能代空港⇔羽田空港が１日２往復している。

首都圏との連絡（資料：観光課）



道路網と鉄道網　（資料：都市計画マスタープラン）

３．歴史的環境

（１）旧石器時代から弥生時代

大館の地域で人々が生活を営んでいたことを確認できる最も古い証拠として、米代川中・上流域に位置する松木高館平遺跡の段丘の赤土の中から発見されたナイフ形の石器が挙げられる。この石器は昭和 61 年(1986)植林作業中偶然発見され、今からおよそ２万年～１万５千年前のものとみられ、すでにこの地に人が住んでいた証となっている。その後、大館盆地は十和田火山の噴火に伴う火砕流に飲み込まれたため、縄文時代草創期までの遺跡は発見されていない。

松木高館平遺跡出土石器

市内では、山館上ノ山遺跡を始めとして縄文時代前期から晩期までの集落等の遺跡 60 カ所ほどが発掘されている。出土した遺物の多くに、青森県の三内丸山遺跡の遺物との類似・共通点がみられることから、三内丸山を中心とする大きな円筒土器文化圏が形成されていたと考えられる。

縄文時代後期の塚ノ下遺跡からは、目に天然アスファルトを充填した土偶などが発見されており、人びとの精神生活の中に祈りやまじないを取り入れていたことや他の地域と物資の交易が行われていたことがうかがえる。

塚ノ下遺跡出土土偶

弥生時代に入ると弘前市砂沢遺跡や田舎館村垂柳遺跡で水田址が発見されていることから、この地方では稲作が始まったと考えられているが、大館市内では、花岡大森上岱の粕田遺跡、大茂内諏訪台遺跡、商人留釈迦池遺跡、川口鳴滝遺跡などの弥生時代の遺跡が見つかっているものの、農耕を示す証拠は見つかっていない。この中で唯一集落跡が発掘調査された諏訪台遺跡からは、５戸の竪穴式住居と土器類が発見されていてムラの姿を推定できる。

（２）古墳時代から平安時代

古墳時代（４世紀から７世紀）の大館地方の遺跡としては、10～11 の小竪穴群で作られたムラから形成された片山館コ遺跡がある。この遺跡は４～５世紀のものと推定されているが、それ以外については人々の詳しい生活様式はよく分かっていない。

律令国家として大和朝廷が日本を支配し始めたころ、北海道や東北地方の人々は蝦夷と呼ばれていた。斎明４年(658)、秋田地方に朝廷の勢力として初めて阿倍比羅夫が進出してきた。この遠征勢力は 180 艘の水軍を率いて日本海を北上し、顎田(秋田)浦に上陸した。当時の族長

たちは朝廷に従う意思を示したことから、阿倍比羅夫は、彼らをもてなし朝廷の官位を授けた。

その後、朝廷の勢力は北進してきたが、大館地域を含む北秋田地方はまだ律令体制の支配下には組み込まれておらず、朝廷に恭順の姿勢を示してはいたものの、独自の自立性をもっていたとみられている。

○元慶の乱

天長７年(830)に秋田を大地震が襲い、またその後年の冷害などにより人々の生活が悪化していた。それにもかかわらず、秋田城司良岑近は、厳しい税の取立てと悪政を行ったため、秋田城の支配下にあった、現在の八郎潟周辺の人々が、元慶２年(878)ついに独立を要求して蜂起した。これが元慶の乱である。この蜂起を支援する形で、朝廷に内属していた上津野(鹿角)、火内(大館・比内地域)、榲渕(鷹巣・阿仁)など米代川流域の六つの村も蜂起した。この事件の記録ではじめて大館地方が歴史に登場する。

この戦いは、蝦夷勢が優勢であったため、朝廷は出羽国の事情に詳しい藤原保則を出羽権守として派遣するとともに小野春風を鎮守府将軍として派遣し説得にあたらせた。

この結果悪政が改められ、乱はおさまった。

しかし、この和平は一時的なものであったため、天慶２年(939)ふたたび反乱が起こり(天慶の乱)、朝廷の支配力が弱まることになった。こうした状況の中で地元の豪族である清原氏らが勢力を伸ばしていった。

（３）中世

①奥州藤原氏と比内河田次郎

11 世紀半ばの前九年の役を経て東北の覇者となった清原氏は、同族内の対立から、源氏(清衡)対清原氏(家衡)の争いとなり、寛治元年(1087)清衡が勝利し、清原氏は滅亡した。この事件(後三年の役)の後、姓を旧姓の藤原にもどし、清衡は平泉に移りいわゆる奥州藤原氏の基礎づくりにつとめた。

その後、奥州藤原氏は清衡から基衡・秀衡・泰衡までのおよそ百年間にわたって繁栄した。

肥内(大館・比内地域)では、前九年の役の頃に新しい勢力が芽生えはじめ、藤原氏の支配が東北各地に及ぶ頃には豪族の河田氏がこの地域を支配していたと考えられている。

こうして、大館地方も 12 世紀に入って、河田氏の支配を受けつつ、「比内郡」として藤原氏の支配に組み込まれていった。

②源義経と平泉

壇ノ浦で平氏を滅ぼし、戦功を挙げた源義経（みなもとのよしつね）は、兄頼朝（よりとも）と不仲になり藤原秀衡のいる平泉に逃れた。頼朝は平泉に使者を送り義経の処罰を命じた。頼朝の攻撃を察した秀衡は、病床で「義経を主と仰ぎ一族固く団結せよ」と言い残して没した。しかし跡を継いだ４代目泰衡は頼朝の圧力に屈して、義経派についた身内ともども義経を討ってしまった。

頼朝の狙いはもともと藤原氏を滅亡させ、自らの勢力拡大を図ることにあったため、義経をかくまっていたことを責めて、平泉に攻撃を開始した（奥州合戦（おうしゅうかっせん））。

文治（ぶんじ）５年（1189）の阿津賀志山（あつかしやま）（福島県伊達郡）での緒戦で、藤原軍が大敗したことでこの戦いの大勢は決まった。泰衡は敗走し、蝦夷島（北海道）をめざして北へ向かい、その途中、藤原氏の家来であった比（肥）内郡贄柵（にえのさく）の領主である河田次郎を頼りにして立ち寄った。河田は保護を求められたものの頼朝を恐れるあまり、逆に泰衡を殺害し、その首を陣ケ岡（岩手県紫波町）まで進んでいた頼朝に持参した。しかし、頼朝は「代々の恩を忘れて主人を殺害した不義不忠の家来」として河田次郎の首をはねさせた。

藤原泰衡を祀る錦神社

泰衡夫人を祀る西木戸神社

およそ百年の繁栄を誇った奥州藤原氏は、こうして滅亡した。河田次郎の本拠地は現在の大館市二井田にあったと考えられており、贄（にえ）の里という地名が残っている。二井田の人々は泰衡の死を哀れみ、首の無い遺体を錦の直垂（ひたたれ）に包んで丁重に葬った。これが後に錦（にしき）神社（二井田橋の近くにある）となり、今も毎年９月３日には地元の人々が泰衡の霊を慰めている。

一方戦乱の中で離ればなれになっていた泰衡の妻は、後を追って五輪台（ごりんだい）の地までたどり着いたが、里人から夫の最後を知らされ、自らの命を絶ったと伝えられている。この夫人は比内町八木橋五輪台の西木戸（にしきど）神社に祀られている。

1192 年、源頼朝が征夷大将軍になり、鎌倉に開いた幕府を拠点に、武士政権を確立した。頼朝は奥州合戦等で活躍した御家人たちに恩賞を与え、河田氏が滅んだあとの比（肥）内地方は、甲斐（山梨県）の浅利義成の所領となった。

鎌倉幕府の支配力が徐々に衰え滅亡後、南北朝時代に入る 14 世紀はじめの秋田地方の有力な豪族には、安東(秋田郡・男鹿)、浅利(比内)、成田(鹿角)の諸氏がおり、また津軽・糠部(八戸)地方を支配していた曽我氏・工藤氏・南部氏等の勢力も強大であった。

60 年続く南北朝の争乱の中で、南部師行(なんぶもろゆき)と津軽の曽我貞光(そがさだみつ)との間に戦闘が始まり、比内地方も戦いに巻き込まれていく。比内の浅利氏は北朝方の曽我氏に加わり鹿角の国代成田氏は南部氏とともに南朝方に味方したため、鹿角・比内地方は両勢力の抗争の場となった。

この戦いは延元(えんげん)元年(建武３、1336)から４年続き、延元３年(暦応元、1338)の南部師行の戦死を期に、南部氏の勢力は比内地方から排除されていった。

戦国時代の 16 世紀初め、浅利則頼(のりより)が甲斐の国から比内地方に移り十狐城(とっこじょう)(比内町独鈷)を築き、比内地方をその勢力下においた。則頼は天文(てんぶん)19 年(1550)没しその位牌は菩提寺の玉林寺(大館市字大館)に伝えられている。則頼の死後、長男の則祐(のりすけ)は、永禄(えいろく)５年(1562)当時勢力を増大していた安東氏との戦いに敗れて、長岡(比内町扇田)で自害。則頼の後を継いだ弟の勝頼(かつより)は安東氏の家臣として比内地方を支配したが、やがて安東氏に反抗し戦いとなり、和睦の隙をつかれ殺された。

独鈷の大日神社(浅利氏の本拠地)

その後、津軽為信(ためのぶ)を頼って津軽に逃れていた勝頼の子頼平(よりひら)は、天正 18 年(1590)為信の助けにより大館城を取戻し、秋田氏(安東氏)との関係は、しばらくは平穏であったが、文禄(ぶんろく)３年(1594)に、再び戦いが始まった。

その頃全国を統一していた豊臣秀吉から、秋田氏(安東氏)と浅利氏は大坂に召喚され、両者の戦いは厳禁している私闘にあたると裁定を受ける。

慶長(けいちょう)３年(1598)１月８日、頼平は急死した。秋田氏に暗殺されたか、浅利の家臣によるものかは不明であるが、浅利氏は滅んだ。

【秋田杉の回送】

秀吉政権のもとで全国の統一が進み、海上交通が発達してくると、秋田杉が注目されるようになった。文禄２年(1593)秀吉の命令を受けた秋田実季は、前田氏の建造する朝鮮出兵用大安宅(大軍船)一艘分と淀舟 30 艘分の材木を送っている。浅利頼平は天正 18 年(1590)から文禄３年(1594)まで、「舟の木・ほばしら、ほけた」などを秋田氏に造船用として送っている。当時の杉山は米代川流域に多く、大館地域では長木沢の高倉山・面倉山・羽保屋山などが中心であった。

（４）近世

①国替えと小場義成の大館入城

慶長 5 年(1600)の関ヶ原の戦いの後、慶長７年(1602)常陸(茨城県)の佐竹義宣が国替えで秋田に入った。このとき義宣の従弟に当たり一族の重鎮である小場義成も秋田に移った。義成は仙北郡六郷にいた後、秋田三郡を治めるため山本郡檜山城に移った。義成は、赤坂朝光に、大館に移って大館とその周辺地域を固めるよう命じた。

16 世紀後半	浅利氏築城(勝頼)
天正 13 年(1585)	安東氏
天正 17 年(1589)	南部氏
天正 18 年(1590)	浅利氏(頼平)
慶長 3 年(1598)	秋田氏(頼平，毒殺される)
慶長 7 年(1602)	佐竹氏(赤坂氏)
慶長 13 年(1608)	佐竹氏(小場氏)

大館城支配の移り変わり

大館地方では浅利伝兵衛を中心として新政反対の蜂起(慶長８年)が起き、立杭村浄応寺の住職日来坊玄 性 (玄生)が、朝光の救援に来た義成と暴動勢との仲介をし、事態をおさめた。この後、浅利氏の旧臣たちや津軽・南部両国境の備えを固めるために、慶長 13 年(1608)小場義成が大館に入城し、慶長 15 年には正式に大館城代に任命された。以降 11 代 260 年間にわたり大館を治めた。なお、小場氏は三代義房のときの万治年中(1658～1660)に佐竹を名乗ったといわれている。(※佐竹西家は６代目から)

大館城代　佐竹氏略歴
西暦年は着任年

代	城代	元号	年	西暦
1	小場義成	慶長	15年	1610
2	小場義易	寛永	11年	1634
3	佐竹義房	明暦	2年	1656
4	佐竹義武	貞享	2年	1685
5	佐竹義方	元禄	10年	1697
6	佐竹義村	宝永	7年	1710
7	佐竹義休	明和	6年	1769
8	佐竹義種	寛政	元年	1789
9	佐竹義幹	寛政	11年	1799
10	佐竹義茂	嘉永	5年	1852
11	佐竹義遵	文久	4年	1864

(「大館の人・事典より」)

大館城は、幕府の一国一城令があったものの、元和６年(1620)に久保田城の支城と定められ、津軽・南部に対する要衝として佐竹西家が城代として置かれて幕末まで治めた。

②津軽・南部との境界

秋田に移った佐竹氏は検地を実施し、所領境界は巡回・調査の上、話し合いで決定した。その結果、矢立峠をめぐる津軽領との境争では、前藩主秋田氏への照会などにより決着した。森林・鉱山資源を抱えた地域をめぐる南部領との境争では、秋田杉の宝庫とされる長木沢一帯はすべて秋田領に、白根・尾去沢などの鉱山は南部領に属することとして幕府より裁定が下された。

③羽州街道

秋田領内の羽州街道は、新 庄 領(山形県)境の院内から津軽領境の矢立峠までの六十三里四丁(約 250km)の道程である。その内大館市域内で、現在の国道７号は、市の中心部や釈迦内地区以外の地域では、ほぼこの羽州街道に沿っている。

街道には、道路管理や旅行者の便のために一里塚が設けられ、大館市域では、長坂、岩瀬、川口、片山、釈迦内、橋桁、白沢、長走（ながばしり）、陣場、矢立峠の 10 カ所に設けられたとの記録がある。（市内の羽州街道沿いで残っている一里塚は、長坂のみである。）

また番所は、慶長 16 年（1611）に白沢村番屋台（後に長走に移設）、延宝 7 年（1679）に十二所、貞享（じょうきょう）元年（1684）に葛原、同年長木沢中羽立に設けられた。

【矢立峠と羽州街道】

秋田県と青森県の境に位置する矢立峠（258m）には、天然秋田杉の風景林が残されている。また両県を結ぶ古羽州街道や旧羽州街道等の歴史の名残があり、享和２年（1802）に伊能（いのう）忠敬（ただたか）が通過し、明治 11 年（1878）にイギリス人イザベラ・バードが通過した際はその美しさを称えている。平成８年（1996）には歴史の道百選にも選ばれ、地元の郷土史会などにより歩道や看板が整備されており、歴史探訪などに利用されている。矢立峠までの沿線には、国指定天然記念物の長走風穴高山植物群落や芝谷（しばやち）地湿原植物群落の自然資源、市指定文化財の松峰山信仰遺跡群のほか粕田（かすだ）酒こし舞や獅子踊りなどの民俗芸能が住民により守り受け継がれている。

④大館城と十二所の町づくり

大館城は 16 世紀後半に浅利氏（勝頼）が築城したのち、小場氏が入城していたが、寛永（かんえい）17 年（1640）の大火で全焼し、再建されたものの延宝３年（1675）にふたたび大火で全焼した後再再建された。城下町は、侍屋敷（内町）と町人町（外町）の二つに分けられていた。

享保 13 年（1728） 大館城下絵図［大館市立中央図書館蔵］

延宝３年の大火を契機に本格的に町割りが進められ、大町を商業活動の中心に定め、町割りと屋敷割をし、油・茶・紙・木綿・繰綿・小間物等の商人たちが移された。鍛冶町や大工町には鍛冶・大工などの職人が集められ、これまで森林や畑であったところに新町が作られた。

南部藩との境にある十二所では、元和元年(1615)十二所城の二代目城代である塩谷義綱が本格的に城郭の建設と城下の町割りを行った。しかし幕府の一国一城令により元和６年(1620)にこの城は破却となった。城代の塩谷氏は、城館を居館に改築して住み、この建物を「再来館」と呼んだ。その後梅津忠貞が所預を３年間務めたのち、天和３年(1683)に茂木知恒が所預に任命され、貞享５年(1688)に再来館は城下町北側の一角に移築した。茂木氏は以降、明治２年(1869)の版籍奉還による解任までの 10 代 187 年間にわたり代々十二所所預を務めた。茂木家の墓地は市の文化財として守り伝えられている。

⑤近世の人々の暮し

寛政年間(1789～)の大館地方では、寛政６年(1794)の「六郡惣高村附帳」によると親郷(と寄郷)が、大館村(18 カ村)、花岡村(12 カ村)、綴子村(４カ村)、十二所町(８カ村)、二井田村(12 カ村)、扇田村(16 カ村)となっており、年貢の徴収、役人や藩士の通行の際の夫役や接待の経費負担など、厳しい支配体制が敷かれ、農民の生活は厳しいものであった。

凶作や飢饉も人々の生活を襲った。大館地方での冷夏・長雨・風水害・干ばつ・病害虫による凶作が、江戸時代に 60 回以上も記録されている。天明飢饉(天明２年(1782)～８年(1788))やその後の天保飢饉(天保４年(1833)～天保 10 年(1839))の惨状も伝えられている。

こうした飢饉が続き人々が苦しんでいた時代、開田や堰の建造が行われ、嘉右衛門堰や重右衛門堰、二井田堰、三浦堰などの用水路は、現在も地域の農業に役だっている。

【市日・曲物】

大館の市は、延宝３年(1675)までは六斎市で二の日は大町と新町が交互に、七の日は馬口労町・中町が交互に開いていた。この年以降は、大町は毎日、七の日は馬口労町・中町・新町が交互に三斎市の開市となった。大町ではこのほか正月 12 日、５月２日の市は盛大に開かれた。

比内町扇田では、江戸時代から現在まで六斎市が開かれている。

秋田杉を材料にした曲物細工が商品として生産され流通したのは、文政年間頃からである。それはもともと樺細工・塗り物・釣り針などとともに武士の内職として興り、発展したものであった。

⑥学問の振興

大館では寛政５年(1793)頃に現在の中城地区に博文(はくぶん)書院が設立された。また十二所には成章書院が設立されている。博文書院の創立当時の規模は、教職員 35 名、学生数 90 名で、成章書院は同じく教職員 28 名、学生 80 名であった。

町人の、同志・同学の人たちは、みずからの教育機関として家塾をつくり、村々では、農民たちが寺子屋をつくった。この家塾・寺子屋は、江戸時代中ごろから広く各地に設けられ、幕末期の家塾の数は、大館町で 14 ないし 15、十二所町では 12 から 13 を数えた。

家塾の中では沼田棟斎(れきさい)、江幡(えばた)掃部、二階堂竹逕(ちくけい)、中田錦江(きんこう)、石井祚景(とみかげ)などがすぐれた教育を行っていた。寺子屋は幕末の白沢肝煎の笹島久蔵など 18 余り、扇田村で６、山田村で２などが知られているが、実際はもっと多かったとみられている。

十二所成章書院之跡碑

⑦久保田藩と蝦夷地

18 世紀半ばになるとロシアが北太平洋へ進出し始めたため、幕府は文化４年(1807)蝦夷地全島を直轄地とし、以降、津軽・南部・久保田・庄内の各藩に、警備や蝦夷地への出兵を命じた。

ペリー来航の翌年の安政元年(1854)には、大館地域からは海岸警備のため、湊、八森、北浦などの要所に、浜松新七、日景八右衛門、高橋専右衛門など 14 人が新家に取り立てられて配置された。またこの年日露通好条約が締結されたが、幕府はロシアの樺太政策に脅威を感じて、安政６年(1859) ９月、久保田・津軽・南部・庄内・仙台・会津・松前の各藩に分割して与え、蝦夷地の開拓の促進と警備の強化とを命じた。この年５月に、大館からは給人 37 人、足軽 96 人の計 133 人が警備の増援に出ている。番士には鉄砲頭根本幾之助、組頭中田順吉、旗奉行沼田助八、目付茂内政吉などがいた。

久保田藩の領分は増毛及び宗谷領から紋別領境までの北部と利尻島・礼文島であったが慶応３年(1867)箱館奉行からの警備の装備充実と人員増員の命令に対し、財政難などを理由に北蝦夷地警備の免除願いを出した。幕府はこれを受けて、免除と同時に領地の上知を命じた。こうして久保田藩兵たちは、増毛を引き揚げた。

⑧大館と戊辰戦争

慶応４年(1868) １月に京都で起こった鳥羽伏見の戦いを契機として戊辰戦争が始まり、新政府軍は東北地方に軍を進めた。これに対し、東北の諸藩は、奥羽越列藩同盟を結んだ。しかし、久保田藩が新政府軍からの参加要請を受け入れ、列藩同盟と戦う状況になった。

大館の十二所地域は、南部藩と境を接していることから８月９日に南部軍が鹿角街道口・葛原口・別所口などから攻め込んできた。南部軍は圧倒的な兵力で勝利し、扇田まで進んだ。久保田藩の茂木勢は岩瀬まで退却し、８月 12 日に奇襲攻撃をかけ南部軍を退却させたが、態勢を立て直した南部軍と８月 20 日に再び扇田方面で戦いが起こり茂木勢は敗れた。

戊辰戦争の激戦地　扇田神明社

これらの戦闘で十二所の町では、神社仏閣や民家など合わせて約 400 戸が焼失し、扇田の町でも 400 戸のうち焼失を免れたのはわずかに６戸といわれる。

南部軍は８月 22 日に柄沢口付近で大館軍と激突し、ほどなくして舟場口以外の大館軍は指揮系統を失って総崩れとなり、相善堂に本陣をしいていた佐竹義遵は帰城し、城に火を放つことを命じて西門から脱出した。

こうして、小場義成が初代城代として入城して以来 11 代 260 年余の間続いた大館城は、炎上し落城した。敗走する大館軍は町にも火を放ち、ほとんどが焼失した。

城を脱出した義遵らは、荷上場で応援隊を待ち、反撃の機会を窺った。

久保田藩を援軍した政府軍の主力は、佐賀・小城・長崎などの九州勢で、８月 29 日に本道・米内沢口・大沢口の三方向から総攻撃を開始し、大館・佐賀連合軍は、徐々に南部軍を退却させ、９月２日岩瀬の戦いで苦戦を強いられていたが、茂木軍が貝吹長根の南部軍を破ると形勢が逆転して連合軍が勝利した。

早口公園の戊辰戦争激戦跡(9 月 2 日岩瀬での戦い)

勢いに乗った連合軍は餅田に軍を進め、大館城奪還のための攻防戦がはじまった。南部軍の強烈な防備により戦いは熾烈をきわめたが、９月５日から翌朝にかけて南部軍は撤退し、連合軍は９月６日大館城を奪還した。７日には十二所奪還のため、大滝・曲田などの戦闘で南部軍を徐々に退却させ、このあとの新沢口や十二所口での戦いで連合軍が勝利し、９月 20 日に南部軍の使者が停戦を申し込んできたことにより大館での 43 日間に及ぶ戦いが終わった。

（５）近代

①明治維新

戊辰戦争で南部藩の進攻を直接受けた大館地方の被害は大きく、十二所、大館、二井田、扇田は町や村そのものが戦場となったため、多くの家々が灰になった。また収穫前の戦闘であり、凶作も重なって、人びとは衣食住が欠乏の状態で被害の復興を図らなければならなかった。

明治維新により、版籍奉還、廃藩置県等が進められ、明治４年(1871) １月に久保田藩は秋田藩と改称され、７月には秋田県となる。また同年４月に戸籍法が制定され、翌年２月に施行された。

行政組織の再編により地方行政地域を大区、小区に区画する大小区制を実施。その後明治 11 年(1878)郡町村制となり、明治 17 年(1884)大館町役場が現在の市役所の向かいに新築された。明治 22 年(1889) ４月に市町村制が施行され、現在の大館市を構成している町や村が生まれた。

明治政府の地租改正により、秋田県も明治 13 年までに地租改正の事業が完了し、山林の多くが国有林となった。

○鉱山

明治 18 年(1885)に、浅利藤松らの堤沢露頭などの発見により、花岡鉱山の開発が開始された。しかし銀の含有量が低下したことにより経営困難となり明治 24 年(1891)に休山となった。12 年後大館市中城に石田鉱業所を経営していた石田兼吉が 1800 円で譲り受け、硫化鉄鉱の採掘に切り替えて操業を開始した。兼吉の死後の同 43 年(1910)小林清一郎が買収し、露天掘の開始、熔鉱炉と火力発電所を建設して銅精錬に着手したが、山林農作物への煙害被害と賠償問題等が生じ、最終的に小坂鉱山へ売却され、大正４年(1915)花岡鉱山は、小坂鉱山の支山となった。その経営が藤田組となった後、新鉱床が発見され、花岡町は鉱山町として発展した。

鉱山の大露天掘り

また、大葛金山は、和銅年間(708 年～)に発見され、奈良東大寺の大仏や、金閣寺の造営に献金したと伝えられている。佐竹藩営から明治に入り官営となり、明治 10 年(1877)に小坂鉱山の所管となった後は、金のほかに銅を含む鉱石を生産するなど栄えたが、鉱脈の減少により、昭和 50 年(1975)閉山となった。

○山林

久保田藩の財政を支えた山林は、明治維新後の明治７年(1874)に内務省の管轄となり、明治 19 年(1886)以降、長木沢、釈迦内(後に大館)、扇田、早口の小林区署が置かれ、山林行政は主に森林伐採の禁止制限を方針としたが、明治 30 年(1897)森林法の公布後、林業の振興を図っ

た。明治 38 年(1905)には、代野(だいの)貯木場と代野苗畑、同 41 年(1908)には早口貯木場が完成する。また白沢・尻合沢林道や岩瀬林道、長部林道など他にも徐々に建設され、木材の運搬とともに製材業も活発化した。

○行政機構の整備

明治４年(1871)の司法省の設置後、秋田県には聴訟課が設置され、明治６年(1873)には大館に聴訟課の支庁が設置された。その後明治 28 年(1895)には秋田地方裁判所大館支部となった。

明治５年(1872)大館郵便局の業務を開始、同 43 年電話交換業務を開始。さらに、大館警察出張所の設置(明治８年(1872))、第四租税検査区大館派出所の設置(明治 18 年(1885))、秋田県輸出米検査所大館支所の設置(明治 38 年(1905))などのほか、大館町農会、在郷軍人会、赤十字北秋田郡委員会大館分区、免囚保護会などが、順次組織設置されている。

②文明開化

○大館の学問の系統・流れ

近世以来、明治期以降も活躍を続ける文人も多く、佐竹西家家老の狩野良知(かのうりょうち)(深蔵)は、秋田明徳館から昌平黌(しょうへいこう)に学び、千秋公園、魁新聞(さきがけ)前身の遐邇(かじ)新聞の名称を名付けた。弟の徳蔵は遐邇新聞の主幹として著名で、秋田県史をはじめ多くの歴史書を編さん、執筆している。

狩野亨吉生家跡

良知の子亨吉(こうきち)(1865～1942)は、幼いときに大館を去っているが、33 歳で第一高等学校長、40 歳で京都帝国大学文科大学校長を務め、夏目漱石との親交は有名である。また安藤昌益の「自然真営道」を発見し発表した。三ノ丸に生家跡がある。

江嵜晩香(えばたばんこう)(味右衛門)は、漢詩、書画俳句に通じ、家塾を開き教育面でも地域に貢献した。郷土の様々な姿を後に伝え、その発展を願った。

紫峰笹島定治が編さんした「大館戊辰戦史」は大館地方の優れた歴史書である。(大正７年刊行)

○近代化への事業

比較的古い(江戸～明治期)大館の人々の生活や風景については、菅江真澄の一連の遊覧記や、土岐源吾(蓑虫山人(みのむしさんじん))の絵日記、イギリス人イザベラ・バードの「日本奥地紀行」などがあり、西洋文明が入る以前の様子を伝えている。

文明開化のための新しい事業については、明治５年(1872)の郵便取扱所の開設、同 14 年(1881)の電信線の架設が挙げられ、照明は洋式ランプが明治 10 年(1877)頃、電燈が大正２年(1913)に始まっている。

鉄道は、青森から工事が始められ、明治 32 年(1899)6 月奥羽北線が矢立峠の難所を超えて碇ヶ関・白沢間が開通し、これが本県の鉄道史の始まりとなっている。また小坂鉱山と大館を結ぶ小坂鉄道(私鉄)は明治 42 年(1909)に開通した。

○近代教育のはじまり

明治 7 年(1874)に玉林寺を借用した中城学校が最初に設立され、その後明治 11 年(1878)までに 25 校が設置された。明治 31 年(1898)には秋田県第二尋常中学校(明治 34 年(1901)に県立大館中学校に改称)が設立されている。

③明治期の社会

明治 7 年(1874)、窮民救済を目的とする救貧法恤救(じゅっきゅう)規則が交付された。また大館町では大正 7 年(1918)に大館聖保羅教会の米国人イバァンスが裏町に私立大館幼稚園を開園し、大館で最初の幼児教育が始まっている。

明治 37 年(1904)に結核予防法が公布され、大正 12 年(1923)には県立大館細菌検査所を設置し、当時亡国病とされた結核の撲滅(減少)に効果を上げた。

○感恩講の活動

大館感恩講(かんのんこう)は、天保 11 年(1840)正月に肝煎石田宗右衛門が、町の有力者が集まる会合で、「今後飢饉や疫病があっても人々を救済することの出来る方法を探っていこう」と説いたことが始まりである。

有志からの寄付や郷役人の役料の一部、土地売買の際の登記手数料の一部などを積み立てて、土地や籾の購入を行ない、明治初年には貯蓄米が 1,000 石余となった。この資産は「田畑郷助(たばたごうすけ)」と名付けられ、初期財産となった。

明治 32 年(1899)に財団法人大館田郷(でんごう)感恩講となった。この後日露戦争、昭和初期の凶作や恐慌時等に約 83,000 人の救助を行い、社会的弱者を救済する精神は、社会福祉法人大館感恩講に引き継がれている。

○公立大館病院の設立

明治 12 年(1879)に大館町の開業医 4 人の発起により私立大館病院が設立された。後に県の計画に基づいて明治 15 年に町村組合の公立大館病院が設立されたが、その後建物の老朽化と医療技術の進歩に対処するため、新病舎の建設に着手し、昭和 2 年(1927)に竣工した。診療科目は内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科・眼科・歯科など 7 科約 70 床を擁する総合病院となった。医療従事者(看護婦)の養成も古

公立大館病院

く、大正８年(1919)に公立大館病院産婆看護婦学校が設立され、昭和 30 年(1955)に公立大館病院附属高等看護学院の指定を受けたが、平成２年(1990)に閉校した。

○公立扇田病院の設立

明治 40 年(1907)公立扇田病院が扇田字白砂に設立された。後述する鳥潟隆三(とりかたりゅうぞう)博士の尽力により優秀な医師を揃え、東館(ひがしたて)村(現大館市)の独鈷や鹿角郡毛馬内(けまない)町(現鹿角市)に分院を設けた。その後、南扇田(現ふれあい公園)に移転し、さらに病棟の増設・設備の強化を図るため昭和 58 年(1983)中山川原(なかやまがわら)の現在地に移転した。

④大正から昭和へ

大正期は、政治的にも経済的にも明治の藩閥政治時代から転換し、民主主義が始まった時代であった。

経済活動を支える鉄道は、奥羽本線の全通後、小坂鉄道花岡線、秋田鉄道(大館・花輪間)が着工された。沿線の鉱山事業の拡張とあわせ、貨物や旅客の輸送に大きな威力を発揮し、地域経済の発達を促した。

企業創設にも大きな影響を与え、大正期に入ってから創設された企業は、木材・運輸・販売業を主に 30 社近くになった。また電気事業や金融も発達し、弘前銀行などの支店も設置された。大戦後の恐慌期になると株式会社大館銀行が創立され、大館の商工業の発展に貢献した。(昭和３年(1928) ９月、大館銀行は羽後銀行と合併した)

その一方、東北地方では大正のはじめ、大凶作が起こり、農民の生活は貧窮化し、北海道方面への漁業出稼ぎが急増した。このため大正 14 年・15 年にかけて出稼ぎ労働者の保護を目的とした出稼ぎ保護組合が県内各地に設立された。

昭和６年(1931)の満州事変、昭和 12 年(1937)の盧溝橋(ろこうきょう)事件で日中戦争が始まり、昭和 16 年(1941)の太平洋戦争へとつながって、昭和 20 年８月 15 日の敗戦まで、日本国民は悲惨な戦争の時代を体験した。大館の人々も、これら戦争の影響を大きく受けることになる。

この時代に活躍した人として、日本外科学会会長を務めた医学博士鳥潟隆三(とりかたりゅうぞう)(1877～1952)と無線電信の先覚者といわれる工学博士鳥潟右一(とりかたういち)(1883～1923)がいる。

花岡本郷の鳥潟（とりがた）会館は、鳥潟右一博士の生家で、その庭園は京風の香り漂う名園であり、現在は市に寄付され管理利用されている。（建物、庭園ともに県指定文化財）

学校教育では、栗盛（くりもり）吉右衛門（1838～1914）が育英事業のために財団法人栗盛教育団を創設し、就学奨励、学資援助事業を行い勉学の機会を与え、人材の育成に努めた。

鳥潟会館庭園

（６）現代

①戦後のあゆみ

昭和 20 年（1945）８月 15 日の終戦により、日本の民主化が進められた。総選挙や地方選挙が行われ行政の体制も整い、また農地改革により自作農が増え食糧増産と生活の安定に向かって歩みだした。教育面でも、新制中学校の設置や高等学校の開校も進んだ。

②産業の移り変わり

昭和 20 年の終戦後、日本の産業界は、朝鮮戦争（1950～1953）による特需景気を機に、急速に復興した。国も工業に力を入れ、飛躍的に発展した。大館でも、建設・製造業などの２次産業や、卸売、小売業、サービス業などの第３次産業の就業人口が増加していった。一方農林水産業の第１次産業の人口は減少していった。

○農林業・鉱業の変化

農地改革後、農業基盤整備事業に伴う農業の機械化や栽培技術の向上により、水稲の 10a 当り収量では、昭和 20 年代の 300kg から昭和 40 年代は 500kg 台に向上した。一方農家戸数や農業就業人口は徐々に減少していて、昭和 55 年（1980）の第１次産業就業人口が 8,659 人から平成 22 年（2010）は 2,892 人となっている。

市の林野率は 70%前後でやや民有林より国有林が多い。木材の生産量は国産材需要の低下とともに減少し、市の製材工場は昭和 47 年（1972）頃の 55 事業所から現在は半数以下となった。

鉱山は古くから開発されてきたが、昭和 30

昭和初期の花岡鉱山役宅街

年(1955)頃から黒鉱の鉱床が相次いで発見され、黒鉱ブームが起こった。しかし昭和 45 年(1970)に始まった世界的な石油危機以後の不況と鉱産物価格の暴落、外国産の安い鉱物資源の輸入が大きく影響し、平成６年(1994)までに、市内のすべての鉱山が閉山した。

○商工業の様子

城下町から発達した大館市は、古くから周辺の町村の中心地として、物資や人の交流が行われて来た。江戸時代の記録によると、商人や職人の住むところを「外町九町」と称してきたものが、現在の商店街に続いている。また各地区では「市日」が開かれていて扇田では 200 年以上の伝統がある。

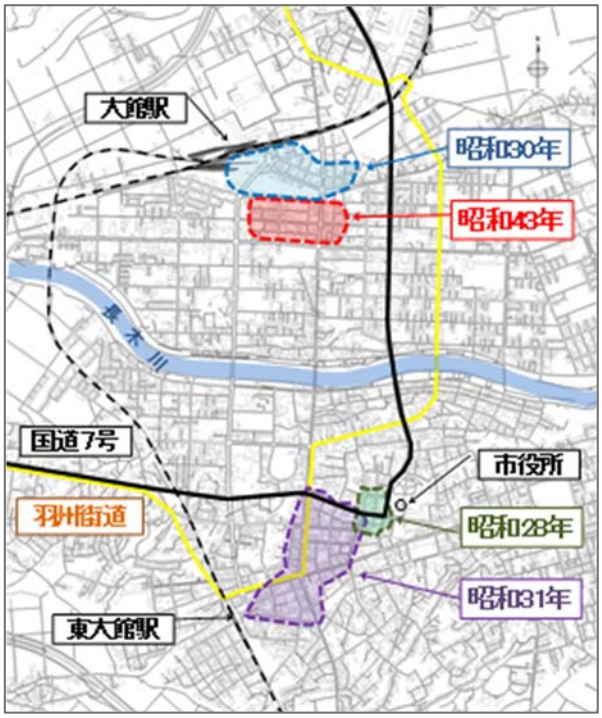
一方、都市計画や道路網の整備、住宅の郊外拡散とともに、長木川をはさんで南北に大型スーパーが進出している。

昭和 40 年代に入ると、地域経済の発展を目指して企業誘致に取り組み、工業団地の造成も進められ、昭和 50 年代以降は、医療用具、縫製、運輸、精密機械などの様々な企業が操業している。

③大館市の大火

大館市は、昭和 26 年(1951)に市制施行してから４度の大火に見舞われている。いずれも木造住宅がほとんどで道幅も狭く、乾燥や強風などの気象条件も重なり大きな火災となった。

昭和 28 年(1953) ４月９日に馬喰町から出火し、官公庁街に延焼し、公立大館病院、郵便局、電報電話局など 137 棟が焼けた。この火災復興事業は区画整理を主とし、旧城下町の二ノ丸、三ノ丸とそれを取り囲む城下町中心部の複雑に入り組んでいた道路の道幅を広げ交差部を十字路に直した。



昭和 28 年以降の大火の場所

２度目は昭和 30 年(1955) ５月３日に御成町１丁目から出火し、国鉄大館駅をはじめ、小坂鉄道大館駅、旅館、映画館等広範囲で 508 棟を焼失した。復興事業は大館駅前の土地区画整理事業により、御成町１丁目の道幅を８㍍から 21 ㍍に拡幅、国道の道幅を８㍍から 18 ㍍に拡幅した。

３度目は、翌 31 年(1956) ８月 18 日には、東大館駅前から出火し、市の中心街(商店街)等で 650 棟を焼失する大火災であった。この火災復興計画は規模が大きく、道路の拡幅拡充、公園

の新設、線形の改良などにより、田、畑、山林、原野が姿を消した。さらに地形が複雑で高低差の著しかったところも切盛整地し、円滑な排水と土地利用を進めた。

そして４度目が昭和43年(1968)10月12日に御成町２丁目から出火し 290 棟が焼失した。この火災復興事業は大館駅前の火災復興事業と併合して、大町通りの道幅を22 ㍍に、その他主要県道、市道の道幅を15 ㍍にし、さらに歩道設置、防火水槽の増設、消火栓の設置などの整備が行われ、10年余の歳月が費やされた。

昭和 31 年大館大火常盤木町上空から

大火後のこうした復興事業を経て現在の商業地や住宅地などの市街地が整備され、消防力の近代化により大火は起こっていないが、古い街並みや記録などは失ってしまった。

④昭和から平成

昭和 40 年代後半から平成６年までに大館市の主要産業であった鉱業が鉱山の閉山により衰退した一方で、現在は鉱山関連技術を生かした資源リサイクル産業や医療器具産業が主力になっている。

また高速交通網は、は昭和61年(1986)東北自動車道と樹海ライン(大館と十和田湖を結ぶ県道)が全線開通、平成10年(1998)大館能代空港(あきた北空港)が開港した。平成25年(2013)日本海沿岸東北自動車道大館北 IC から小坂 JCT 間の開通、さらに平成28年(2016)には、大館北IC から鷹巣(たかのす)IC の区間が開通し、生活圏の拡大や観光振興、物流の効率化による地域経済の活性化などに期待が寄せられている。

鉄道では平成21年(2009)小坂鉄道(私鉄)が廃止され、平成26年(2014)に大館市に寄贈された。沿線には風光明媚な長木川渓谷や温泉があるほか、平成 24 年

長木川渓谷と紅葉

長木川渓谷とレールバイク

(2012)からは、軌道を使ったレールバイクの乗車イベントが始まり観光資源として利用されている。

平成５年(1993)には秋田職業能力開発短期大学校が開校、平成８年(1996)には秋田桂城短期大学(平成 17 年(2005)に秋田看護福祉大学として４年制に改組)が開校し、教育機関の充実にも力を入れている。

平成 27 年(2015)10 月には茨城県常陸大宮(ひたちおおみや)市と友好都市協定を結び、江戸時代に佐竹氏が秋田へ国替えとなって以降 400 年の時を超えた交流が始まった。

（７）代表的な先人達

① 浅利則頼（あさりのりより）　戦国時代　　～天文 19 年(1550)

浅利則頼は 16 世紀初頭、永正年間に甲斐の国から比内地方に移り、十狐（とっこ）城を築いて本拠として比内地方を領有した。弟の頼重を笹館（ささだて）城代、同じく弟の定頼を花岡城代として、比内地方を勢力下に置いた。また、十二所、八木橋に一族を配した。また、独鈷大日堂の再建と鳳凰山の麓に玉林寺を建立した。

② 小場義成（おばよしなり）　永禄 12 年(1569)～寛永 11 年(1634)

常陸国那珂東郡小場の小場城の十代目。慶長 7 年(1602)佐竹氏転封により、秋田に入り、仙北郡六郷、山本郡桧山と移る。慶長 13 年(1608)津軽と南部の両国境の抑えとして、大館に入る。慶長 15 年(1610)初代大館城代に任命され、城郭の改修と拡張に着手し、町割りを行う。寛永 10 年(1634)まで在任した。また義成とその子義易（よしやす）は、現在の北秋田全域から山本郡常盤村、志戸橋村に至るまで開墾事業を進めた。

③ 安藤昌益（あんどうしょうえき）　元禄 16 年(1703)～宝暦 12 年(1762)　思想・医学

享保 17 年(1732)に京都で医学修行を開始し、３代目味岡三伯に師事した。

延享元年(1744)に八戸に移住し、町医者をしながら、平等な社会を求める独自の思想を生み出した。

代表的著作である『自然真営道』の中で、江戸幕府を頂点に武士が他の身分を支配する現実の社会を批判している。そして、すべての人が自然の中で農耕を行って生活をすることにより、貧富の差も支配関係もない平等な社会が実現すると述べている。

宝暦８年(1758)に妻子を八戸に残して、故郷である大館市二井田に移住した。

昌益の思想が村に広まり、村人は昌益を尊敬して寺や神社の宗教的行事を行わなくなり、昌益の死後、昌益の門弟と寺や神社の間で争いがおこったという記録が残されている。

平成 24 年(2012)に墓が県指定史跡になった。

④ 岩沢太治兵衛（いわさわたじべえ）　文政３年(1820)～明治 31 年(1898)　産業・経済

今の大館市中町に生まれる。子どものころ、飢饉に苦しむ人々を見て「一人の人間も飢えさせてはならない」と強く心に誓った。

役所に勤めると、飢饉にそなえて寄付を集め、米 1800 石(約 270 トン)を蓄えた。この米は、「戊辰の役」という戦争で町のほとんどが焼けたときに役に立った。また、ほかの人たちと協力して「田畑郷助」というしくみをつくった。これは、米やお金をためておき、生活に苦しんでいる人たちに与えようというもので、今でも「大館感恩講」として活動を続けている。

⑤ 狩野良知（かのうりょうち）　文政 12 年(1829)～明治 39 年(1906)　人文科学

藩校明徳館に学び、その後当時の最高学府である昌平黌（しょうへいこう）で学んだ。安政４年(1857)に『三策』を作成し開国論を主張した。(著書『先憂文編』の「付録」の記述による。また安政元年(1854)に執筆されたとの説もある。)「上策」は交易を通じ、外国文明を取り入れて世界の動きを知ること。「中策」は軍隊を充実させ、港を封鎖し外交を拒絶して外敵を撃退すること。「下策」は外国人のおどしを受けて何もしないでいること。「上策」が最高の策で、「中策」はやむを得ず行う策であると結論づけた。この『三策』は、明治元年(1868)に吉田松陰が開いた松下村塾から出版されている。

戊辰戦争では、大館城代の家老として本荘に進軍した。明治７年(1874)に内務省に入り、退官後は秋田に帰り文筆の面で活躍した。秋田市の「千秋公園」の命名者。

⑥ 栗盛吉右衛門（くりもりきちえもん）　天保９年(1838)～大正３年(1914)　教育・福祉

大館市に生まれる。８歳の時に父が北海道で荒物屋を開いていた関係で、母とともに函館に渡る。しかし、店が火災になり、父が管理していた船が難破するなど不運の連続で倒産し、一時は姉とともにセンベイやアメの行商をして生活を助けた。父の死後独立し、安政４年(1857)に大館にもどり呉服小間物屋“ 松前屋” を開き、一代で財を築いた。

自らの体験から、いかに才能があってもお金がなければ成功できないことを悟り、自分の財産を使って奨学金の貸し付けをするなどの育英事業を始めた。この事業は以後４代にわたり引き継がれ、栗盛教育団の解散後、財産のすべては大館市に寄付された。洋館風の事務所は、大館市立栗盛記念図書館として活用されたが、老朽化のため取り壊され、跡地には、現在の大館市立中央図書館が建てられた。

⑦ 日景弁吉（ひかげべんきち）　嘉永元年(1848)～大正 8 年(1919)　教育・福祉

大館市釈迦内に生まれる。藩校明徳館で学び、戊辰戦争では、応援各藩の応接係とともに、海岸防備に従事する。

明治 7 年(1874)に釈迦内村にできた向陽学校(現在の釈迦内小学校)を日景学校と改称し、のちに自分の所有地に新築した。さらに、日景英学校を設立するなど教育に力を注いだ。また、土地を切り開いて、釈迦内と立花、白沢と矢立峠を結ぶ道路をつくった。このほか、機織りの技術を教える養成所の設立、養蚕(蚕を飼い、糸をとること)、杉苗の栽培などの産業を興した。

明治 12 年(1879)から県議会議員を 12 年間務めた。最初は、自由民権派の秋田改進党に所属したが、のちに秋田中正党に移って政治活動をした。

晩年は、自ら開発した日景温泉で過ごした。

⑧ 狩野亨吉（かのうこうきち）　慶応元年(1865)～昭和 17 年(1942)　人文科学

帝国大学(現在の東京大学)を卒業後、金沢の第四高等中学校で教授を務める。その後、熊本の第五高等学校を経て、34 歳の若さで第一高等学校の校長になる。

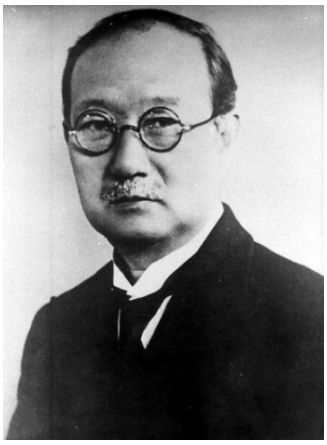
明治 39 年(1906)に初代の京都帝国大学(現在の京都大学)文科大学長になり、内藤湖南や幸田露伴ら民間の優秀な人材を招き、大学の発展に尽くした。

明治 32 年(1899)に安藤昌益の『自然真営道』の写本を発見し、ひそかに研究を続けた。明治 41 年(1908)に『内外教育評論』に「大思想家あり」を発表し、安藤昌益を世に紹介した。昭和３年(1928)には岩波講座『世界思潮』に「安藤昌益」を発表し、その思想を詳しく紹介した。

夏目漱石と親しく、名作『我輩は猫である』の猫の飼い主の苦沙弥先生のモデル。

東北大学図書館の「狩野文庫」は亨吉の収集した蔵書。

⑨ 鳥潟隆三（とりかたりゅうぞう）　明治 10 年(1877)～昭和 27 年(1952)　医学



函館に生まれる。幼少期を函館で過ごした後に、大分中学校、第一高等学校、京都帝国大学(現在の京都大学)医学部へと進んだ。

大正２年(1913)にスイスのベルン大学に留学し、「血清細菌学」を研究する。

「イムペジン学説」を提唱し、帰国後に鳥潟免疫研究所と附属病院を設立し、この時期に外用薬「コクチゲン」(鳥潟軟膏)を発明した。

大正 11 年(1922)に京都帝国大学教授になり、平圧開胸術を考案して肺結核外科手術を向上させた。その後、日本外科学会会長に就任し、昭和 20 年(1945)から昭和 22 年(1947)まで疎開して故郷の花岡で暮らした。

昭和 26 年(1951)には、花岡の邸宅と庭園(現在の鳥潟会館)が当時の花岡町に寄贈され、一般の利用に開放されている。鳥潟会館は平成 23 年(2011) 3 月に秋田県指定文化財に、庭園は秋田県指定名勝に指定された。

⑩ 鳥潟右一(とりかたういち)　明治 16 年(1883)～大正 12 年(1923)　技術・工学

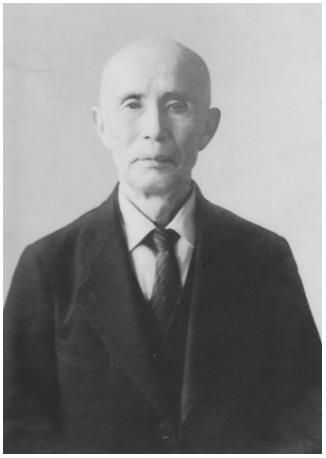
大館市花岡町に生まれる。大分中学校から東京の開成中学校に転校し、第一高等学校、東京帝国大学(現在の東京大学)電気工学科へと進んだ。明治 39 年(1906)に大学を首席で卒業後、逓信省電気試験所に入り、通信技手になる。

明治 42 年(1909)からアメリカやイギリスなど５カ国に留学し、帰国後にＴＹＫ式無線電話を発明した。ＴＹＫは共同発明者の鳥潟右一、横山英太郎、北村政次郎の３人のイニシャル。その後、三重県鳥羽市で無線電話の世界初の実用化に成功した。

大正４年(1915)には、東京と中国の上海の間を、無線電話を使って通信することに成功し、世界的に有名になる。

大正９年(1920)に逓信省電気試験所長になったが、1923 年に亡くなる。

⑪ 荒谷武三郎(あらやたけさぶろう)　明治 17 年(1884)～昭和 37 年(1962)　自然科学



大館市比内町扇田に生まれる。明治 39 年(1906)に秋田師範学校(現在の秋田大学)を卒業し、釈迦内小学校に赴任した。

大正５年(1916)には矢立小学校の校長になり、風穴の理論的研究に着手した。大正９年(1920)に「風穴の研究」を『理学界』に発表、大正 11 年(1922)には「矢立風穴」を『地学雑誌』に発表し、注目を集めた。昭和２年(1927)には風穴研究の集大成として「秋田県長走風穴に就て」を『地球』に発表した。

大正６年(1917)から昭和５年(1930)までの 13 年間、釈迦内小学校の校長を務める。

郷土研究にも熱心で、大正７年(1918)には『釈迦内郷土誌』を完成させた。この『釈迦内郷土誌』は、平成元年(1989)に地区の有志の手で復刻刊行された。

⑫ 山田定治（やまださだじ）　明治 31 年(1898)～昭和 58 年(1983)　産業・経済

北秋田養蚕講習所に学び、大正 10 年(1921)に大館町農会技術員になる。昭和 7 年(1932)に大館にできた秋田県種鶏場の日本鶏飼育係助手に採用され、その後、県職員、大館鳳鳴高校事務長を務めながら、声良鶏・比内鶏・金八鶏の三鶏の飼育を行い、天然記念物への指定を働きかけた。その結果、昭和 12 年(1937)に声良鶏、昭和 17 年(1942)に比内鶏が国の天然記念物に、また昭和 34 年(1959)に金八鶏が県の天然記念物に指定された。

退職後は、自宅に声良鶏の孵化場を併設し、昭和 47 年(1972)に施設を整備し「天然記念物秋田三鶏資料収蔵庫山田記念館」として開館した。平成 22 年(2010)に大館郷土博物館の敷地内に新築された「秋田三鶏記念館」が、その役割を引き継いでいる。

⑬ 小林多喜二（こばやしたきじ）　明治 36 年(1903)～昭和 8 年(1933)　文学

大館市川口の農家に生まれる。多喜二が４歳の時に一家をあげて北海道小樽へ移住し、叔父のパン屋を手伝いながら、大正 13 年(1924)に小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)を卒業し、北海道拓殖銀行に就職した。

昭和３年(1928)に小樽の三・一五事件を題材とした『一九二八年三月一五日』を発表し、プロレタリア作家として注目を集める。

昭和４年(1929)に代表作『蟹工船（かにこうせん）』を発表したが、左翼活動のため北海道拓殖銀行を解雇され、翌年上京した。以後、プロレタリア作家同盟の有力な指導メンバーとして活躍する。弾圧を逃れて地下生活に入ったが、昭和８年(1933)に逮捕され、築地署で激しい拷問を受けて死亡した。

４．文化財の指定状況

（１）指定文化財の概況

大館市の指定文化財は、平成 27 年(2015) 3 月末現在、国指定が 7 件、県指定が 16 件、市指定が 45 件で、合計 68 件である。また、国登録文化財は 1 件であり、これらの内訳は下表の通り。

文化財の種別指定状況 **（平成 27 年 3 月 31 日現在）**

部門	種別	国指定	県指定	市指定	合計	国登録
有形文化財	建造物	1	2	1	4	1
	絵画		1	7	8	
	彫刻			8	8	
	工芸品		5	7	12	
	書跡・典籍		1	4	5	
	考古資料		2	2	4	
無形民俗文化財	民俗芸能			5	5	
	風俗慣習			1	1	
史跡名勝天然記念物	史跡		3	8	11	
	名勝		1		1	
	天然記念物	6	1	2	9	
合計		7	16	45	68	1

（２）代表的な文化財

①国指定等文化財

【重要文化財】

○大館八幡神社（建造物）

初代大館城代小場義成が常陸太田八幡宮の神霊を勧請（かんじょう）し大館城の守護神として城内に祀っていたもので、貞享（じょうきょう）４年(1687)第４代佐竹義武が大館城及び大館鎮守総社として、大館城下東端の現在地に遷座建立したものである。

神殿は、大館城に向かって西に面して建てられ、左に正八幡宮本殿、右に若宮八幡宮本殿を配し、両殿ともに桃山式の遺風をもった、洗練された流造の建物である。小規模だが、県内では数少ない 17 世紀の神社建築として、また東北地方の近世社寺建築を代表する建造物としての価値が高い。

【天然記念物】

○長走風穴高山植物群落（天然記念物）

長走風穴は、国見山（454m）の麓に位置しており、真夏でも０～５℃の冷風を吹き出している。このため、標高 170～240mの風穴周辺には、オオタカネバラやコケモモなど標高 1000m程度の亜高山帯で見られるような植物が群生している。

長走風穴では、これらの高山植物が群落で自生し、周辺の植物群とは全く異なる景観を呈しているため、学術的に極めて貴重な場所として、国の天然記念物に指定されている。

○芝谷地湿原植物群落（天然記念物）

芝谷地湿原は、この地方にごく普通にあった低地湿原だったが、こうした湿原は水田耕作や宅地造成のため急速に消失していったため、現在では低地に残された人為的影響のない貴重な湿原として、国の天然記念物に指定されている。

芝谷地湿原では、学術上価値の高い湿原植物が数多く自生しており、食虫植物が多いこともこの湿原の特徴となっている。また、ハッチョウトンボを始めとして多くのトンボや、水辺の野鳥・小動物などを手軽に観察することができる。

【登録有形文化財】

○桜櫓館（建造物）

桜櫓館は、大館町長をつとめた櫻場文蔵（1883～1971）が昭和８年（1933）に建てたもので、現存する棟札により設計者は石田常吉・小野熊蔵、大工棟梁は越後甚吉である。

建物は、木造２階建、洋室を備えた和風住宅で、展望台として使われた塔屋を持ち、複雑で変化に富んだ外観である。内部は杉の良材をふんだんに使い、質の高い空間が創出され、建具や付書院に優れた技能が発揮されている。櫻櫓館は、たびたび大火に見舞われた大館旧市街地にあって、現存する数少ない質の高い近代和風住宅として貴重である。

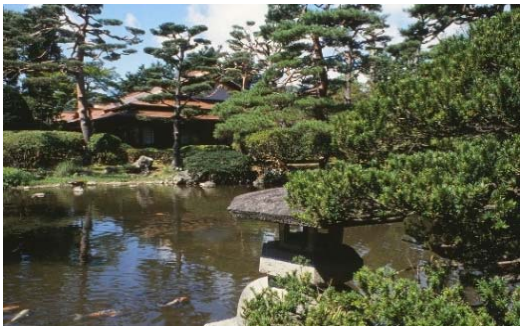
②県指定文化財

○北鹿ハリストス正教会聖堂（建造物）

この聖堂は、北鹿ハリストス正教会聖堂（曲田福音会聖堂）として、畠山市之助等によって建てられたもので、工期は３ヵ月で明治 25 年（1892）７月 31 日に竣工し、成聖式がおこなわれた。

聖堂の建築は、本来煉瓦造りか石造りであるが、当教会の聖堂は秋田杉をたくみに加工し、聖所の架構法も四方から木製アーチをのばしてドームをかけるなど、貴重な木造ビザンチン様式建造物である。聖堂内の聖像画（イコン）18 点は、日本最初の女流洋画家山下りんの作品で、19 点が大館市有形文化財に指定されている。

○鳥潟会館・庭園（建造物・名勝）



鳥潟家は慶長年間から 400 年余の歴史をもつ旧家であり、旧花岡村で代々肝煎を務めてきた。8000㎡を超える広大な敷地に建つ建物及び庭園は、元京都帝国大学名誉教授（医学部長・日本外科学会会長）の鳥潟隆三博士によって京風の意匠を取り入れられ、現在の形に整備された。

庭園は同時期に京都の名門植治７代目小川治兵衛の門弟であった粕谷幸作が作庭している。各地から吟味された良材が取り寄せられ、幅３ｍを超える鞍馬石や直径１ｍを超える伽藍石などが使用されている。中門などの建造物には、京都を中心に活躍した成行兼太郎が大工棟梁として携わっている。

○矢石館遺跡（史跡）

矢石館遺跡は、早口川右岸の段丘縁辺部に位置し、本郷・中仕田集落の中間地点に分布している。昭和 27・28 年（1952･1953）に武藤鉄城、奥山潤の両氏による発掘調査が行われ、組石棺５基が発見されており、昭和 28 年３月 10 日に秋田県史跡に指定された。

発掘調査により、組石棺のほか多数の土器・石器などが出土した。遺跡は、出土した土器から、時期は縄文時代晩期前葉を中心とする、組石棺を持つ墓域を含む集落跡と考えられる。

○矢立廃寺跡（史跡）

矢立廃寺跡は、菅江真澄や二階堂道形の記述が残されていて、地元では古くから萬里小路藤原藤房卿（無等良雄）の隠遁の古跡で、秋田市山内の松原補陀寺の前身として言い伝えられてきた。

昭和 34 年（1959）に秋田県史跡に指定され、昭和 39･48･59～61 年には５次にわたる発掘調査が行われたが、当地にこれらの建造物が営まれた社会的（政治・経済・文化・信仰など）背景については解明されておらず、今後の調査・研究をまたなければならない

○安藤昌益墓（史跡）

安藤昌益は、江戸時代中期の思想家である。昌益の思想は、明治 32 年（1899）に狩野亨吉が見出した稿本『自然真営道』で知ることができる。

昭和49年（1974）郷土史家の石垣忠吉ら大館市史編さん委員会による二井田一関家文書の調査で、明和元年（1764）、昌益の三回忌法要の記録である「掠（かすみ）職手記」と名付けられた昌益の没年に関する資料が発見され、昌益の菩提寺が温泉寺であることが判明し、境内には「堅勝道因士」の戒名を含む墓石と「昌安久益信士」と刻まれた墓石が発見された。

③市指定文化財

○武家門（建造物）

明治中期に比内地方の大地主であった長岐家が佐竹公別邸の門を模して建立した。総欅の堂々とした造りで昭和51年（1976）旧比内町の文化財として指定された。

○田代岳の岳参り作占行事（風俗慣習）

田代山（岳）は山頂に湿原があり、湿原には神聖視される池塘（ちとう）がある。そこは雨乞いの場であり、作を占い、豊作を祈る場である。

半夏生の前日、神主が作占いの許可を願う。翌日、作占いの神事を行い、その結果を告げられる。県北部のみならず津軽地方からも参拝者が訪れ、作占いの結果を聞き、笹とつげを持ち帰る。それを田の水口に立てて虫除けにするという習わしが続いている。

○代野番楽（民俗芸能）

現在は、地元の稲荷神社で毎年元旦に奉納されている。その昔（約400年前）、村を訪れた旅芸人が伝えたと言われているが、昭和35年頃からしばしば休止し、昭和48年（1972）に再開した。番楽の踊りの主流は武士の踊りである。休止した間に脱落した部分もあり、13あった演目のうち、6演目のみが演じられている。

○蛭沢（ひるさわ）の獅子踊り（民俗芸能）

伝えによれば、安永年間（1772～1781）または文化年間（1804～1818）に津軽から伝来したとされ、豊作祈願、悪病除けに、盆の 13 日と 14 日に踊られている。蛭沢にはもと獅子宿があり、獅子関係の道具（獅子頭や衣類）の保管にあたっていた記録が残っている。

○山田の獅子踊り（民俗芸能）

慶長 7 年（1602）、豊年万作・無病息災を祈って始まったという。この年は佐竹義宣が秋田移封を命じられた年である。佐竹氏が大館城に入部の際に、山田獅子踊りを披露し、小場義成公からお褒めの言葉を受けたという。昭和 10 年代（1935）に一時休止したものの、昭和 22 年（1947）に再開し、盆の 13 日と 14 日に踊られている。

○独鈷囃子（民俗芸能）

かつて十狐城を築いた浅利則頼公が、城内で行われた酒宴の席で自ら剣を振り舞ったのが由来とされている。「寄せばやし」「本ばやし」「剣ばやし」「帰り山車」の４種類が伝えられており、毎年大日神社例大祭の日に保存会の人たちにより奉納されている。

○大館囃子（民俗芸能）

京都の祇園囃子の流れをくむと伝えられ、伝習には２説あり。①：大館城主となる佐竹氏が常陸の国より転封となる際に、道中の行進曲として使用、のちに城中に出入りする商人等に親しまれ広まった。説②：大館の地主や町方の親方が若者を京都に送り、伝習させた。400 年ほど前から地元神明社例祭の余興奉納として若者たちが腕を競った。戊辰戦争やその後の相次ぐ大火で記録は消失し、残っている記録は、明治 22 年（1889）の小野儀助日記の記述。

○十二所城代茂木家墓地（史跡）

十二所城は、十二所町の南側台地に築かれ、浸食谷を空堀とし、浸食谷により孤立した四つの台地を郭とした構造になっている。中世は浅利氏家臣十二所信濃が居住し、浅利、秋田、南部の抗争の中で幾度か城主を変え、佐竹氏国替え後は赤坂朝光が守備についた。元和元年(1615)に塩谷義綱が「所預」に任命され、翌年十二所の屋敷割りが実施された。しかし、本城は、幕府の一国一城令によって、元和６年(1620)に破却された。その後、十二所所預は、梅津氏、茂木氏が務めた。

十二所茂木家墓地は、十二所駅南側の台地上の西寄りに設けられ、十二所茂木三代知暢（とものぶ）以降の代々の墓が建てられている。

成章書院は寛政５年(1793)創立。藩士の弟子の教育を目的とした。

○松峰山信仰遺跡群（史跡）

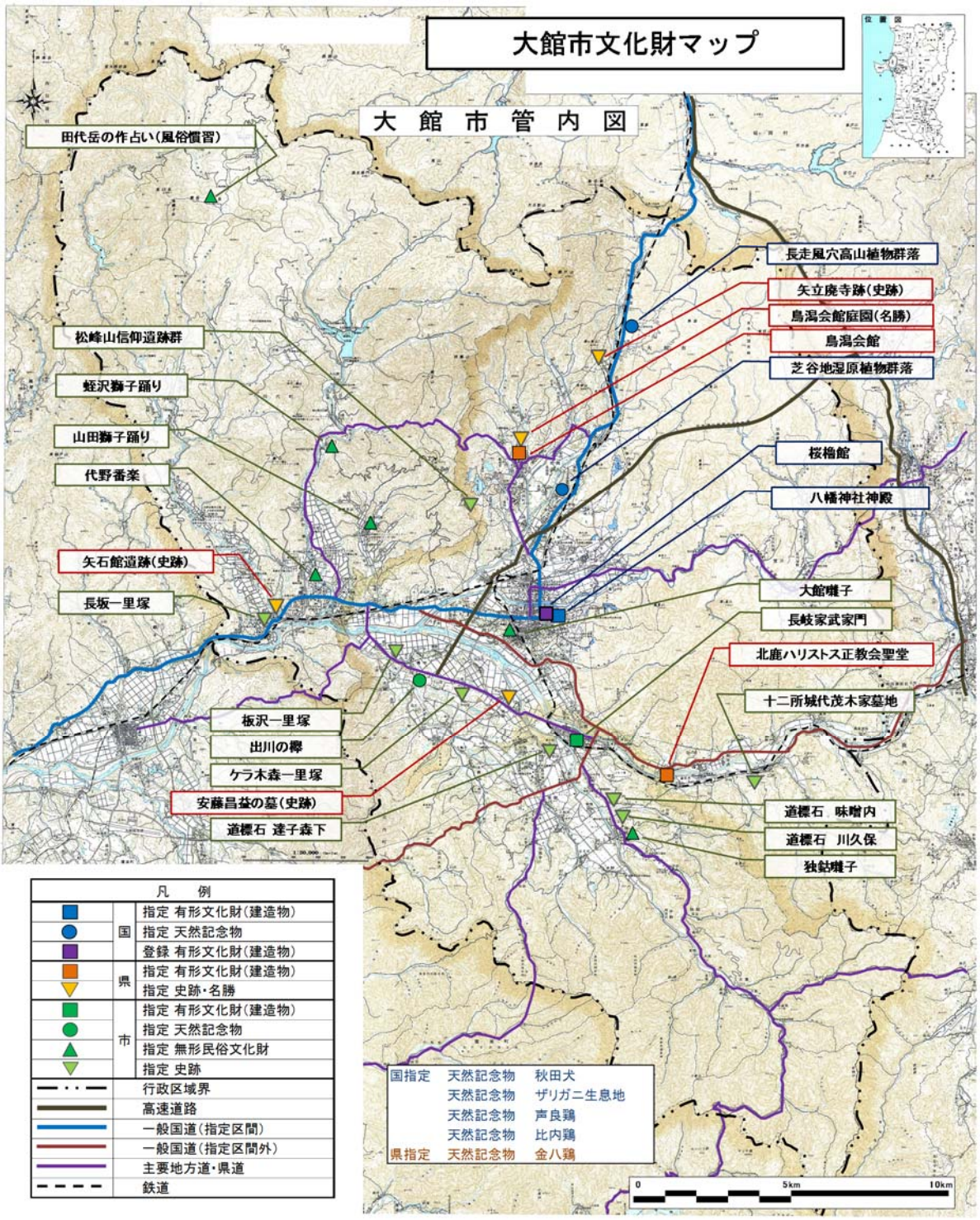
松峰山（大山）は、大館市において最も古い歴史を有する信仰の山であり、松峯（まつみね）神社を中心に古代・中世に縁起をもつ密教遺跡が分布する。それは現在確認できるもっとも古い史料として、慶長６年(1601)に杉沢喜介が秋田実季から管理をまかせられ、そのための経費として三十六石四斗があてがわれていることからも証明される。

さらに、江戸時代には民間信仰遺跡が、大館地方の人々の厚い心思を受け、それは明治、大正、昭和の各時代を経て現代に継承されてきている。

○出川（いでがわ）の 欅（けやき）（天然記念物）

出川村の伝承によると、この欅は今から 700 年以上の昔に小松源七という人物が植えつけたもので、板沢の八幡神社の欅と板子石の山神社の欅とは兄弟木であるという。この欅は、村の象徴であり、村を守護する霊木であると信じられてきた。

根元の周囲に発育している多数の巨大なコブもまた信仰の対象となり、母乳の出ない産婦が白布で作った細長い小袋に白米を入れ、それをコブに備えてお祈りをし、それを家に持ち帰り飯に炊いて食べると母乳が出るようになると伝えられ、「おっぱいの神様」として信じられてきた。



【指定・登録文化財（建造物・史跡・名勝・天然記念物・無形民俗文化財）の分布状況】

大館市の文化財（指定、登録）

国指定有形文化財

種　別	名称		員数	指定年月日	所在地
建造物	八幡神社		２棟	平成　2. 3.19	大館市
天然記念物	長走風穴高山植物群落	第１次指定		大正 15. 2.24	大館市長走
		第２次指定		昭和　6.10.23	
	芝谷地湿原植物群落			昭和 11. 9. 3	大館市釈迦内
	秋田犬			昭和　6. 7.31	
	ザリガニ生息地			昭和　9. 1.22	大館市
	声良鶏			昭和 12.12.21	
	比内鶏			昭和 17. 7.21	

国登録有形文化財

種　別	名　称	員数	指定年月日	所在地
建造物	桜櫓館(旧桜場家住宅)	１棟	平成 11. 7. 8	大館市

秋田県指定文化財

種　別	名　称	員数	指定年月日	所在地
建造物	北鹿ハリストス正教会聖堂	１棟	昭和 41. 3.22	大館市曲田
	鳥潟会館(旧鳥潟家住宅)	８棟	平成 23. 3.22	大館市花岡町
絵　画	絹本阿弥陀来迎図	１幅	昭和 35.12.17	大館市比内町
工芸品	太刀　無銘 伝一文字成宗	１口	昭和 40. 2.23	大館郷土博物館
	刀　銘 大和大掾藤原正則	１口	昭和 46. 7.17	大館市十二所
	脇差　銘 粟田口一竿子入道忠綱彫同作	１口	昭和 30. 1.24	大館市
	小柄　金銀地杢目鍛 銘 正阿弥伝兵衛	１本	昭和 38. 2. 5	大館市十二所
	鍔　竹林猛虎の図 銘 秋田住重具	１枚	昭和 38. 2. 5	大館市十二所
書跡・典籍	菅江真澄著作	46 点	昭和 33. 2. 5	市立中央図書館
考古資料	鋒形石器	２点	平成　5. 4. 9	大館郷土博物館
	塚ノ下遺跡出土土偶	１点	平成 23. 3.22	大館郷土博物館
史　跡	矢石館遺跡		昭和 28. 3.10	大館市早口
	矢立廃寺跡		昭和 34. 1. 7	大館市白沢
	安藤昌益墓		平成 24. 3.23	大館市二井田
天然記念物	金八鶏		昭和 34. 1. 7	
名　勝	鳥潟会館(旧鳥潟家住宅)庭園		平成 23. 3.22	大館市花岡町

大館市指定文化財

種　別	名　称	員数	指定年月日	所在地
建造物	武家門	１棟	昭和 51. 1.20	大館市比内町
絵　画	絵馬額	２枚	昭和 48.10.11	大館市比内町
	観経曼荼羅	１幅	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	釈迦涅槃絵	１幅	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	花鳥　佐竹義文	１幅	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	花鳥　戸村後草園	双幅	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	聖像画(イコン)	19 点	平成　3. 9. 3	大館市曲田
	釈迦涅槃図　紙本彩色	１軸	平成　3. 9. 3	大館市十二所

種　別	名　称	員数	指定年月日	所在地
彫　刻	大日如来像　木造	1体	昭和 48.10.11	大館市比内町
	十一面千手観音菩薩像 木造	1体	昭和 48.10.11	大館市比内町
	四天王像　木造	4体	昭和 48.10.11	大館市比内町
	不動尊像　木造	1体	昭和 48.10.11	大館市比内町
	毘沙門十王像　木造	10体	昭和 48.10.11	大館市比内町
	延命地蔵菩薩　木造	1体	昭和 59.12.10	大館市
	虚空蔵菩薩　青銅造	1体	昭和 59.12.10	大館市花岡町
	放光王地蔵菩薩座像 青銅造	1体	平成 13. 3. 5	大館市
工　芸	脇差　銘 出羽住忠秀	1口	昭和 52. 3.22	大館市
	刀　銘 来国俊	1口	昭和 52. 3.22	大館市
	太刀　銘 京都住人菅原国長	1口	昭和 52. 3.22	大館市十二所
	琵琶	1基	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	鰐口	1口	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	赤絵茶壷　　長康亭道三	1個	昭和 54. 7.20	大館市比内町
	刀　銘出羽住正近	1口	昭和 55. 3. 4	大館市
書跡・典籍	十二所士族屋敷絵図	1軸	昭和 54. 3.29	大館郷土博物館
	鸞斎書「六曲一双屏風」	1双	昭和 56. 3.30	大館郷土博物館
	扁額「十二天」	1面	平成 3. 9. 3	大館市十二所
	真崎文庫	2,081点	平成 17. 9. 1	市立中央図書館
考古資料	大型ナイフ形石器	6個	平成 4. 6.15	大館郷土博物館
	壷(珠洲焼)	3個	平成 4. 6.15	大館郷土博物館
民俗芸能	山田獅子踊り		平成 6. 5.31	大館市山田
	蛭沢獅子踊り		平成 6. 5.31	大館市岩瀬
	代野番楽		平成 6. 5.31	大館市岩瀬
	独鈷囃子		平成 12.12. 6	大館市比内町
	大館囃子		平成 13. 8.29	大館市
風俗慣習	田代岳の岳参り作占行事		平成 7. 3.17	大館市田代岳
史　跡	道標石　　達子森下	1基	昭和 53. 6.15	大館市比内町
	道標石　　川久保	1基	昭和 53. 6.15	大館市比内町
	道標石　　味噌内	1基	昭和 53. 6.15	大館市比内町
	板沢一里塚	1対	平成 元. 3. 3	大館市板沢
	ケラ木森一里塚	1基	平成 元. 3. 3	大館市二井田
	十二所城代茂木家墓地		平成 3. 9. 3	大館市十二所
	長坂一里塚		平成 15. 7. 7	大館市長坂
	松峰山信仰遺跡群	26件	平成 21. 5. 1	大館市松峰
天然記念物	出川の欅		昭和 53. 3.13	大館市出川
	御神木の欅、イチイ		平成 7. 3.17	大館市岩瀬

５．大館の伝統文化

豊かな大地と豊富な森林資源に恵まれた大館市は、その地勢からこの地方固有の伝統的な産物を創り出した。

津軽藩との境界論争で得た秋田杉の宝庫からは「大館曲げわっぱ」が、そして第三期古層腐植土で形成される比内地方の黒土を主としたミネラル分が多い土壌からは日本三大美味鶏として名高い「比内地鶏」が生まれた。加えて、「きりたんぽ鍋」は伝統的な食文化として大館に古くから根付いている。

また、藩政時代に番犬や闘犬に使われた大館犬は、「秋田犬」として昭和６年(1931)に日本犬では最初の天然記念物として指定された。

（１）大館曲げわっぱ

①起源

秋田音頭にも歌われている「大館曲げわっぱ」は、全国各地にある曲げ物の中で唯一、通商産業大臣(現経済産業大臣)が伝統的工芸品に指定(昭和 55 年(1980))した大館の特産品である。

もともとは、木こりが杉柾で曲げ物の容器を作ったのが始まりで、藩政時代には大館城主佐竹西家が、領内の豊富な天然杉に着目し、下級武士たちの内職として奨励し普及発展したと伝えられている。

②1100 年前の曲げわっぱ

また、平成 11 年(1999) ８月に発見された埋没家屋からは、完形の曲物(口径 13 ㎝、高さ９㎝、底径 13 ㎝)が出土している。これは延喜 15 年(915) ７月に噴火したとされる十和田火山から噴出したシラス層の下から出土したことから、10 世紀初頭のものと考えられる(現在大館郷土博物館に展示　右写真)。

曲物(道目木遺跡)

これが「大館曲げわっぱのルーツ」であると断定することはできないが、少なくとも 1100 年以上前から、この地方には完成度の高い曲げ物が存在していたという証ではある。

※10 世紀初頭の遺跡(餌釣館山王台遺跡)に比べて、10 世紀中ごろ以降の遺跡(大館野遺跡、扇田道下遺跡)からの遺物では、杯(椀)、皿類の土器が著しく減少する傾向がみられていることから、この頃には多くの木器が使われていたのではないかと考えられる。

③生活道具から美術工芸品に

薄い板を曲げて底をつけ、桜や樺などで縫いとめて作る「曲げ物」は、全国各地で作られ、昭和 30 年(1955)ごろには、生活道具の大半は木製であったが、その後、金属、ガラス、プラスチックに代わられ、大館曲げわっぱもまた試練の時期を迎えた。

その後、時代は本物志向の風潮が高まり、新しいデザインを取り入れた多くの製品が生み出され、今では職人たちの技術向上と創意工夫で美術工芸品としての価値を高めている。

おひつ隅丸七寸

弁当箱

④大館に根付いた文化としてつなげる取り組み

かつて大館曲げわっぱには、樹齢 300 年を超える天然秋田杉が使われていたが、今では天然秋田杉自体がほとんど手に入らなくなっている。そのため、将来に向けて大館曲げわっぱに使える良質の植林秋田杉を育てようと、林業関係者とのコラボレーションで「曲げわっぱの森」の活動も広がっているとともに、天然秋田杉に代わる人口杉の選別法確立に向け、市と米代東部森林管理署、県立大木材高度加工研究所、大館曲げわっぱ協同組合の４社が適材木選別調査協定を締結している。

また、地元の子供たちに「大館曲げわっぱ」の良さを伝える取り組みとして、子供たち自身で曲げわっぱの食器を作り、給食で使用するという取り組みも広がっている。

（２）比内地鶏（比内鶏の一代雑種）

比内鶏は大館市を中心に分布する日本鶏で、その成立は江戸時代と推定される。古くから肉、卵は食用として、また毛羽等は兵具や獅子頭の装飾用として徴用の対象になったことが古文書にうかがわれる。

とりわけこの鶏の声価を今日まで高めたのは、その美味なる肉であり、この地方の名物であるきりたんぽ鍋は、この肉を用いることを本場の定義としている。

比内地鶏

山鳥の風味とコクを持ち、抜群の出汁が出るこの鶏は、もともと古くから比内地方で飼育されてきた日本固有の地鶏である。

比内鶏を含む純粋日本鶏は、肉用鶏や採卵鶏に比べると非生産的であることから減少の一途を辿ることになる。これに危機感を感じた山田定治氏(大館市)の努力により、昭和 17 年(1942)に比内鶏は国の天然記念物に指定された。

以後、食用には一代交配種の「比内地鶏」が作出され、当地を代表するブランドとして市場に流通している。

（３）きりたんぽ

「たんぽ」の起源は、秋田県北部が広く「ひない」と呼ばれていた時代にさかのぼり、狩りで山に入ったマタギが、ご飯をこねて木の串に巻き付けて、山神様へのお供え物にしたのが始まりとされている。また、自給自足の祖先たちが、秋の農作業を終えて米、みそ、鶏などを持って炭焼きのために山籠もりをした際に、その日残ったご飯をこねて丸め、串に巻いて焼き干して食べたという夜長の廃物利用食が始まりという説もある。

いずれにしてもこの地域には、農民がその年の農作業を終え、一年中の慰安を兼ねた収穫感謝祭や一家団らんの食事に貧富の区別なく、必ず手づくりの「たんぽ」を会食する風習が続いてきたことだけは間違いがない。

①古文書の記録

「タンポ」が古文書に登場するのは、菅江真澄遊覧記(寛政 6 年(1794))で、今からおよそ 220 年前、「キリタンポ」は阿仁前田の俳人・庄司唫風「郡方勤中日記」(慶応元年(1865))というから、少なくとも県北地方では、150 年ほど前から食されているということになる。そのほかの文献から見ても、きりたんぽ鍋がハレの日や一般家庭料理として提供されるようになったのは、これらの文献から、幕末から明治にかけてと考えられる。

たんぽづくり（鳥潟会館）

②たんぽ会の文化

大館では、秋口になって新米が出ると「たんぽ会でもしようか」という言葉があいさつ代わりになる。きりたんぽ鍋で一杯飲もうというのが「たんぽ会」であるが、この季節になると肝心のたんぽが出ない「たんぽ会」さえ開かれるほどで、人が寄り集まった会に出るハレの食物のイメージがある。

また、結婚式の後やお祭りで一族郎党が集まるとき、大切なお客様や懐かしい友達、里帰りの子供たちを迎えるのも「きりたんぽ鍋」である。大館人が最上のおもてなしを込めて提供する料理であり、久しぶりに帰郷した方には「きりたんぽ鍋」を食べて初めて大館に帰ってきたことを実感できる故郷そのものと言える特別なご馳走なのである。

③本場大館きりたんぽの誇り

大館人の「きりたんぽ」に対する思い入れは大変強い。今では、きりたんぽ鍋は全国各地で食べることができるが、まがい物が登場し「おいしくない」などと評されると論争が起きるほどである。まずいきりたんぽは許せないと、今では「本場大館きりたんぽの定義」があり、天然記念物「比内鶏」の血統である「比内地鶏」や地場産の食材を使う厳密なレシピが定められているほどである。

こんな熱意で始まった「本場大館きりたんぽまつり」は今年 43 年目を迎え、今では大館樹海ドームを会場に開かれる一大イベントになっている。全国においしい大館の味を発信し、一度食べた人はまた大館に戻ってくるような、最上のおもてなしを目指して毎年開催している。

※厳密な定義はあるものの、市内の各家庭で作られているものは、すべて「本場おおだてきりたんぽ」であるとされている。これもまた故郷の味の所以である。

(参考文献)

寛政６年(1794)　菅江真澄遊覧記「奥のてぶり」

木材をくりくぼめたものにご飯を入れ、細い杵で突いて餅にした「たんぱやき」

天保６年(1834)　「天保飢饉見聞記」長谷川伊右衛門

「反甫(たんぽ)」飯をつぶし、長い木の串に蒲の穂のように握りつけ、炉火に焼いて味噌をつけ、焼き乾かして食べる。松橋栄信：校注

元治元年(1864)　二井田一関文書「日監」

「扇田の病人模様宜敷候よしタンポと鶏壱羽牛蒡添テ遣候」

慶応元年(1865)12 月 30 日　阿仁前田の俳人・庄司唸風「郡方勤中日記」

宅にてキリタンポ振舞相はしめ候

明治 20 年(1887)12 月１日　小野儀助日記

大町の呉服店「まるこ」の大旦那が「夜、鶏皿やき・タンポに而大食せり」

ドイツの建築家ブルーノタウトが昭和１１年２月に秋田市を訪れた際、川反で「とりわけ有名なキリタンポをごちそうになって」(「日本美の再発見」)いる。その頃には、広く秋田県の料理となっていた。

（４）秋田犬

秋田犬の祖先犬は、マタギ犬(山岳狩猟犬)で、中型か中型よりやや大きい程度の熊猟犬であった。藩政時代、佐竹西家(小場家)は、闘犬によって武士の魂を養ったと伝えられ、闘犬は大館を中心に発達したことから、大館犬と呼ばれた。

闘犬は明治、大正時代に最も盛んになったが、しばしば闘犬禁止令が出され、一時闘犬が行われなくなった。その後、明治 42 年(1909)頃から再び盛んとなり、より強い犬を求め土佐犬との交配が積極的に進められるなど、秋田犬の純粋性が危ぶまれるようになった。

秋田犬は国犬として保存すべきであるという声が高まり、昭和２年(1927)に大館町の有志により秋田犬の純粋種保存の基盤づくりが行われ、昭和６年(1931) ７月に日本犬としては、最初の天然記念物として国の指定を受けた。

この１年後、帰らぬ主人・上野英三郎(東京帝国大学教授)を渋谷駅で待ち続ける秋田犬忠犬ハチ公の記事が朝日新聞に報道され、注目を集めた。

２年後には、渋谷駅のハチ公像が除幕され、ハチ公は翌昭和 10 年(1935) ３月８日、11 歳４か月で死亡したが、主人に忠実な秋田犬は、忠犬ハチ公の名とともに、ますます世に知られることになった。

秋田犬

[秋田犬保存会]

この昭和９年(1934)頃から、秋田犬保存会は犬籍登録を実施、昭和 13 年(1938)には「秋田犬標準」も制定され、展覧会も開催されるようになったが、これは太平洋戦争の勃発によって、一時中断されることになった。

戦後はいちはやく復活、昭和 22 年(1947)からは展覧会を開催し、同 24 年(1949)からは会報「秋田犬」が発行されるようになり、同 28 年(1933) ５月からは社団法人組織に移行、運営されている。

昭和 24・5 年頃(1949・1950)からは全国各地に支部、総支部の設立がはじまって、現在では、東北北海道、関東、東海北陸、関西、中国四国、九州に総支部が置かれ、その管下には 50 余の支部があり、海外には、米国・ロサンゼルス支部と台湾支部がある。そうして春秋 2 回の本部展・総支部展は勿論、各支部は年間１～２回の展覧会を開催し、それ以外に観賞会や研究会を随時催している。

尚、本会は昭和 52 年度(1977)が創立 50 周年に当り、それを記念して秋田犬会館が設立された。１階は本部事務室、２階が会議室で３階が秋田犬博物室になっており、我が国犬種団体唯一の博物室として高く評価されている。